

20121017

絵本学会 NEWS No.46

発行：絵本学会

発行日：2012年10月17日

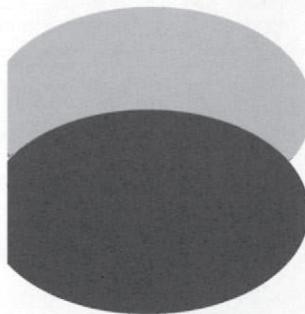
編集：絵本学会広報委員会

絵本学会事務局：〒112-8681 東京都文京区自白台2-8-1

日本女子大学児童学科 石井光恵研究室内

E-mail:ehon-g@xqe.biglobe.ne.jp

<http://www.u-gakugei.ac.jp/ehon/index.html>



第15回絵本学会大会報告
「てくてく座」のお芝居
研究発表・作品発表
ラウンドテーブル
絵本学会第15回定期総会報告
各委員会から
事務局からのお知らせ
お知らせー絵本関連展覧会など
絵本の声を探して 灰島かり

絵本学会

会長就任にあたって

松本 猛

このたび、絵本学会会長のお話をいただいた時、1997年の絵本学会設立のころのことを思い出しました。当時、今井良朗先生や中川素子先生や太田大八先生をはじめ、たくさんの方たちと学会の必要性について熱く語り合ったものでした。

私自身の絵本研究との関わりは、それより20数年前、母であるいわさきちひろの没後一年目に、卒論「絵本的表現の分析」を書いたことに始まります。幸運にも、それが雑誌『月刊絵本』に連載され、『絵本論』という本にまとめることができました。1977年には、いわさきちひろ絵本美術館（現、ちひろ美術館・東京）を設立しました。当時、いわさきちひろの作品を含めて絵本画家の作品は、どこの美術館でも展示することはほとんど不可能でした。絵本を美術作品、芸術作品とは誰も認めていなかったからです。当時のちひろ美術館は大変小さなものではありましたが、絵本の専門美術館ができ、まがりなりにも、美術館と名のつく施設が絵本画家の作品を「美術作品」として扱ったことは、ある意味でセンセーショナルなできごとでした。

子どもに何かをあげようとするときに「アメか、おもちゃか、絵本か」というふうに考える人が、まだまだ多い時代でした。もちろん、それ以前から武井武雄や初山茂や茂田井武のような「絵本画家」の作品の価値を認識している人も、数は多くはありませんでしたが、たしかに存在はしていました。しかし、70年代に入ってからも編集者の中でさえ、絵本の美術的価値をわかっている人は決して多いとはいませんでした。今は亡き長新太さんが「描き上げた絵を渡すと、ありがたそうに受け取っていく編集者が、玄関を出ると絵をくるくると丸めるんだから。ぼくはそれを二階のアトリエから見ていたんだ」と語ってくれたことをよく覚えています。多かれ少なかれ、古くから絵本を描いていた画家の多くは、つらい経験をたくさんしています。長さんが、絵本学会の設立に大変に協力的で、いろいろと意見をいってくださったのは、絵本の芸術的価値を世の中が

認識するためには、美術の一ジャンルとしても絵本を研究する絵本学会が必要だと考えていたからだと思います。

1970年代は、60年代に登場した、優れた絵本作品を受け継ぎながら、作家たちのなかで何を描いたらいいのか、絵本表現とは何かという論議が巻き起こった時代でもありました。しかし、幼児教育や児童文学としての絵本の概念から独立した絵本表現についての研究や評論はなかなか進みませんでした。研究や評論をしたくて、発表の場がほとんどなかったというのが実情でした。

絵本学会の設立は、そのような状況が20年以上も続いてきたなかで切実に求められていたのです。作家にとっても、作品の評価や相互批判の場を作ることが、絵本の発展につながるを考えていた人がたくさんいました。絵本学会の設立当時は学会への期待が渦巻いていました。

この15年の間に『絵本の事典』の刊行に象徴されるように、絵本学会の活動がきっかけとなって絵本の研究は確実に進んできました。児童文学、幼児教育はもとより、絵本の歴史、マンガや美術といった周辺分野との関係、作家論などの研究は飛躍的に進んだといえるでしょう。

しかし、その一方で、作家や編集者など実作者の学会への参加が減少したように感じられます。学会の活動が研究にシフトされてきたのかもしれません。

会長就任にあたって、私は設立当時のよう、作家や編集者や読者や研究者が一緒に、絵本とは何かを語り合い、魅力ある絵本を作りだそうという雰囲気を持った学会運営が出来ればと考えています。もちろん、私がひとりで何かができるわけではありませんが、実作者との関係を密にした学会づくりを目指したいと思います。非力ではありますが、会員の皆さまとともに、参加して楽しい、魅力ある絵本学会にしてゆきたいと思いますのでよろしくお願いします。

第15回絵本学会大会報告

芝居小屋の八千代座で絵本学会山鹿大会を開催いたしました！

大会実行委員長 長野ヒデ子

大会実行委員 大坪恵理子 勘角幸子 吉田寛子 石川和代 江藤直子 野口弘子 山崎寿雄



この度の八千代座大会では大会始まって以来の延 800人を超える参加者、馴染みの絵本作家によるお芝居、ラウンドテーブルも、実際に深く掘り下げた締めくくりの黒田征太郎、佐木隆三、福元満治のシンポジュームも、研究発表も作品発表も例年以上に力が入った空気を感じました。八千代座魔力のなせる技でしょうか。集客の力はなんと言っても、お笑いのように馬鹿ばかしいお芝居をあれほど真剣にやれる「てくてく座」飯野和好座長一同。内田麟太郎詩人の朗読、「わにわにが～」と山口マオ琵琶演奏、すべてにおいて絵本をさらに違う観点からとらえることを教えられ、考えさせ

られる大会でした。

ひとえにご支援ご協力頂きました山鹿市長をはじめ山鹿市民、地元で中心的役割を果たされた「風吹きカラス」とボランティアの皆様、学会会長はじめ会員の皆様のおかげです。

たくさん嬉しい感想もいただきました。学会会員からの感想はとても良かったという感想が沢山ありました。例えば

「大会が大成功で大きな喜びを感じている。『風吹きカラス』の皆さんのエネルギー、統率下、整然たる運営は感嘆に値する素晴らしいもの。参加者もボランティア数も大会始まって以来の記録と思われます。ボランティアの方々は催し物を見ることも叶わず、ご自分の職務を全うされておられ頭の下がる思いがしました。八千代座に積み重ねられてきた文化の重みが、皆様を突き動かしてきた源泉なのかもしれませんね」

「多様な会員が集まる絵本学会ならではの柔軟性や多様性が実感できた大会であった。テーマに掲げた「大衆性＝娯楽性」という点では十分に醍醐味が發揮された大会であった。学会という高度な研究テーマを議論する専門家集団の場において会員の想に幅があるので娯楽的趣向を取り入れた大会もたまには歓迎されて良いと感じた。八千代座という歴史的建造物での開催場所として満足。研究発表においては関心を引くテーマもあったが理論的裏付けに



無理があるようなケースも見られ、数を縛りもう少し工夫改善があつてもいいのでは。テーマ性のまとめは乏しかったが黒田さん佐木さんのトークは感動的。人間の根源的な叫びを聞いた。絵本学会ならではのいろいろな大会があつてよい」

「今までにない素晴らしい大会だった。八千代座で研究発表できること生涯わすれない」

「学会始まって以来の面白い、温かい大会で参加者もかってない多数の参加者で驚いた」

「多方面の方に学会を知ってもらえるいい機会でよかった、ボランティアさんが素晴らしい」

「学会は面白くないものと思っていたのに、このように面白い学会は初めて、よくやった」

「参加者が喜んでくれるよいい大会にしたいと、いう気持ちがボランティアさんから伝わって温もりのある心のこもった大会、今後見習いたい」

「八千代座が素晴らしい！こうゆうところでの学会も時々やってほしい」

「山鹿の組織力と働きぶり評価する声がほとんど、もう一度太田さんの提唱された初心に帰って活動しよう、研究だけが目的ではない」

「八千代座の長い、長い時間と人々の悲喜交々といっしょの空間は大衆の力が輝いていた」

などなど。でも厳しいご指摘もありました。

「参加者の多さは学会始まって以来、事故がなくてよかった。お芝居はつまらなかった」

「中身がないお笑いでしかないお芝居を見させられ、これは学会ではない。考えるべきだ」

「学会は研究の場、作品発表ももっとじっくり聴きたかった、資料部数が足りなかった」

でも一般参加者のアンケート感想のほとんどは「てくてく座が面白かった」「参加できてよかった」と「絵本学会にまた参加したい」と絶賛した感想ばかりでした。例えば

「絵本学会というのを知らなかった、今後も参加したい、いろいろな人と交流ができる」

「素晴らしい学会。こんな面白くて勉強になる学会なら次回も楽しみにぜひ参加したい」

「絵本作家の素顔が見られて作品にますます興味がわいた」

「研究発表も熱があって勉強になった。私たちの街でもやりたい。やるには条件があるの？」

「こんなに笑ったことはない。本当に面白かった。元気が出た」

そして山鹿については「いい温泉、いいお湯また家族と行きたい」とお褒めをいただきましたが当たり外れもあったようで、「温泉や土地柄はとても気に入ったが料理が最悪、美味しくなかった、高かった」と厳しいご意見もあり観光協会は「これを機会に本腰を入れて考えたい」といわれ、いろいろ刺激になったようで大事に見守ってゆきたいですね。



研究発表と作品発表についての感想は正置友子さんの発表に対する評価が一番多く、「聞けてよかった」という感想が多く寄せられていました。また医師による病状と作品の関係を医師の目で追われた異色の研究発表もありました。ラウンドテーブルも大変白熱した様子でいつもと空気が違うという声ばかり。これも八千代座マジックなのでしょうか。

その大会に至るまでのご報告も申し上げたいと思います。私は学会の理事をさせていただきましたが無知が故に申し訳ない事ばかりでした。他の理事の方は長年理事に携わっている研究者、大学の教授の方々のベテランばかり。私は場違いで戸惑いばかりでございました。と申しますのが絵本だから「学」でなく「楽」の絵本樂会。絵本に関わるいろいろな立場の人が、発言し研究していく会だと創設当時、設立者の太田大八さんから伺っていたのですが、理事になってみて「楽」でなく学術研究の学会だと言うことを思い知りました。そのことはとても大事と思うのですが、絵本というメディアで大人から子どもまであらゆる層の人々がつながるもの、だから時々は皆が交じり合って、ぐちゃぐちゃとあらゆる分野の人と人が触れ合うことも大事なのに、その場が少ないのでないかと思ったのです。特に現場で絵本を子どもたちに手渡している方たちも参加でき、大事なのは専門家ばかりでなく普通の生活者の中から絵本を見る目をもつ、一般の方と同じ土俵で互いに学ぶ様々な型の大会もあってもいいのではないかと。絵本だからこそこの「一般人」の底力に学ぶべきものが多いと思うのです。そういう様々な大会も時々やれたらいいなあと。

唐津大会、岡谷大会と大学以外の場所での大会もこれまでにありました。でも最近は会場が大学ばかり。大学で学会が開かれることの利点もいっぱいあります。でも一般人は学術会議なのだと敷居が高く戻込みするところもあり、もっとザックバランに大学を離れた別の会場ですのも、たまには新しい刺激を生むことだろうし、小難しいことは抜きにして大学とは違う場所もたまにはいいのではと、熊本山鹿市の国の重要文化財の芝居小屋「八千代座」で学会をと提案いたしました。

理由は九州でしばらく大会が開かれてない。山鹿市には文庫活動から始まった「風吹きカラス」が実際にいい活動をしている。深い

交流があるので頼める。さらに周りには「熊本子ども の本研究会」、「子育支援ワーカー・ペペペラン」、「ピ ピン」グループ等の活動も目を見張るものがあり応援 団はバッチャリ頼めると心積もりがありました。

しかも九州には親しくしている石風社の福元編集 者、黒田征太郎、佐木隆三直木賞作家が今一番気になる絵本を出しているし、横山眞佐子さんならどんな大物でも猛獣使いのごとく大事なものを引き出してくれる力がある。シンポジウムはこの方々がいる。|そ の結果、この滅多に聞けない組み合わせは絵本学会ならこそと絶賛される方ばかりでした。|

100年の歴史を持つ八千代座を中心にした温泉町で街の佇まい も風情もあるところでの大会は大きな意味があり、図書館がない 山鹿市の図書館活動のきっかけにもなると。

嬉しいことに理事の皆さんはこの提案の八千代座には大変興味持ってくださいましたが、「地元に大学も学会員も専門家もいらない ところでやるのは並大抵で難しいのでは? 学会から出せる資金は 30万。これで会場を無料で貸してくれところが無ければ絶対無理」 等いろいろ難題が挙げられましたが何としても今回は八千代座で やることに意味があると力説し、意気込みで乗り越え、理事会も 八千代座に仮決定してくれましたが難題が山のようにありました。 大学も会員も全く無い地方で大会を開くということがどのような ことであるか今後の参考になるかとおもい経過を上げてみますと。

「風吹きカラス」のメンバーの活躍が地方であるがため知られて ないので「素人集団で本当にできるのか?」と不安がられました。 事務局は協力するが、他の理事は皆忙しく遠すぎる。理事で実行委 員ができるのは言い出しつづけの長野一人。頼りない長野一人と全 て素人集団とでやれるのか。八千代座を無料で借りられるか、また は使用料を払わずにすむ方法を見つけられるか? というような 難題もいっぱいあり、こんなことに一番似つかわしくない私が実 行委員長をやるのでは、理事会の不安と心配も並大抵でなかったかと思 いますから当然です。

でも「八千代座で!」と山鹿の皆さんも「やる!」と引き受け てくれ、大会成功に向けて勤めている仕事もやめ、取り組むという「風 吹きカラス」代表の大坪さん達 7名。メンバーには市の職員の山



崎寿雄さんもいて心強く、皆で成功させようと誓いました。

そこで八千代座の会場を無料で借りるため山鹿市に交渉。地元 「風吹きカラス」の今までの実績が評価されて借り上げ料に当たる 額を「助成金」で出してくださることになりました。山鹿市と山鹿 市教育委員会は共催。しかし主催は絵本学会だけでなく、地元の「風 吹きカラス」も主催であるというのが条件でした。地元の人が主 催なら助成金は出せるが、地元でないところにはダメいうわけで す。ところが理事会では「特定のところから助成金をいただいでは、 公平性がなくなる良くない」とのご指摘もあり「主催は絵本学会のみ である」とのご意見。「岡谷大会の時は市長とイルフ童画館が主 催では?」とお願いすると、「岡谷市とイルフ童画館は実体がよく 知られているに対して、地方で活躍していても、読書会のグルー プとはちがう」との理事会の回答。助成金なしでは会場費は高い ので大会は開けません。困りましたが理事会は「前例はないが今回 に限り」と「風吹きカラス」も主催にいれてください助成金もいた だけました。ほんとうに感謝です。

それから八千代座を絶賛しているが本当に大会がひらける場所 であるか事務局長視察。打ち合わせに実行委員長が現地に行くにし ても、地元のメンバーが上京するにしても開催地が遠いと交通費・宿 泊費がかかるので大変です。地元「風吹きカラス」上京の1人分 旅費は出していただけて助かりました。

事務局長の視察後「八千代座は素晴らしい会場。面白い大会が開 けられる。問題点もあるがそれはなんとか解決できる」とお墨付 をいただき八千代座に正式決定。



芝居小屋にふさわしい大会にしたい。山 鹿の皆さんと知り合ったのも絵本からなの で、テーマは「絵本からはじまる 絵本か らつながる」で八千代座ならメインは特 別公演のお芝居で幕開けをと決めました。 10年前この八千代座で公演した絵本作家 のメンバー「てくてく座」に相談。「学会に お金はない、旅費も宿泊料も謝礼もない手 弁当。でも八千代座の舞台踏めるよ! 絵本 学会を盛り上げて! 山鹿市に八千代座を いっぱいになるほど人を集めると約束した の。たすけて!」と頼みました。座 長の飯野和好さんはじめ誰もがなんと「山 鹿は大好き、一肌脱ごう」と快く応じてく

ださりましたのです。

「やるからには楽しく！」とお芝居の練習が始まりましたが、最初は八千座の舞台が踏めるだろうかというほどのハラハラでした。でも、忙しいメンバーが時間をやりくりして集まり稽古が終われば飲み会、本当に仲良くなり心地よい交流が生まれました。さすが表現者、セリフも忘れたりしましたが、いざ舞台に立つとみごとオーラが出るからすごい。

稽古場所には出版社の会議室を渡り歩き編集者も巻き込みました。すると

「絵本学会でお芝居を！驚き！学会も変わったのねえ、今まで学会には関心無かったけど参加します」と編集者。実際に福音館書店、岩崎書店、小学館、絵本館、ほるぷ出版、解放出版、集英社、小峰書店、偕成社、石風社など多数の編集者が参加くださりこんなことも今までなかったことでした。チラシもあちこちにまき「学会って面白いのね」と言われ、アフリカ、台湾、沖縄、沖縄の久米島、北海道からも参加者がありました。

また印刷屋、文字屋、製紙会社さんに医師も「絵本学会って何？」と参加されましたよ。

ラウンドテーブルも含め。芝居小屋での大会ということで「絵本の大衆性」「絵本の演劇性」「絵本の人権」「九州から送る風」と全体に意味のないような曖昧なテーマで開くことになりました。この曖昧さが、物足りなかったとの指摘もありましたが、今回参加して「絵本ではじまり 絵本でつながる」の1つでも見つけていただければと思いました。

でも「てくてく座」のお芝居にしても費用がかかります。資金が足りません、開催ギリギリにプログラムに「広告を載せ資金にしたい」と理事会に相談したところ「絵本学会は一度も広告を取ったことないが他の学会はとっている」と許可を得ましたが、「絵本を論議する上に置いて特定のところから広告をいただくと評論が公平でなくなる危険性もある、賛成できない」というご意見もあり他の方法を考えることにしました。それで絵本学会でなく「てくてく座」にご祝儀をいただくなら学会に迷惑をかけないで済む、これだと！

そこで幕間に垂れ幕広告 1口 1万円以上で募集することにました。このアイデアは大好評で絵本作家全員夜中まで描いて仕上げた 64件の垂れ幕を花道から掲げて舞台を一回りしたのは圧巻でした。その貴重な絵入り垂れ幕はご祝儀いただいた全員にお届けし喜ばれ、「てくてく座」の資金になり本当に助かりました。おひねりもお芝居を盛り上げかなりの額が集まり全て「3・11東日本大震災災害義援金」にいたしました。

この垂れ幕の和紙は重要無形文化財備前名尾和紙、衣装提供は重要無形文化財久留米紺人間国宝の松枝玉記氏の久留米紺をお借りし地元から沢山のご支援をいただきました。

予想外は受付締切日に定員 200名をオーバーする申し込みを受け「どうしよう！」と真っ青になりましたが「てくてく座」が急速2回公演を快く引き受け下さり切り抜けました。

波乱万丈でいろいろとありましたが八千代座魔力をいただいて大会を終えることができました。不十分なこと多々ありましたが



それにもかかわらず、ある絵本学会会員からユーモアと暖かいお気持ちの感謝状までもが届き一同歓声を上げました。

これからも絵本を通じて嬉しいつながりがもて、より良い研究と、いい作品が生まれ、良き手渡し手が生まれるように、絵本の底力を信じて絵本学会が更に素晴らしい学会になることと祈ってやみません。ありがとうございました。

そして東京でも、と「てくてく座」は 9月 29日新宿紀伊国屋ザンシアターで公演。入場料金の全ては東日本大震災被災地の子どもも読書活動支援にいたしました。

絵本作家のお芝居なんて、こんなこと2度とないと思いましたが 2度目があったのです。山鹿ではお芝居も見ず大会にご尽力くださった「風吹きカラス」をご招待し皆で打ち上げも致しました。これもひとえに絵本学会があったからこそ。面白かったです。感謝です。

*シンポジウム「絵本の大衆性」は、次号で掲載します。



「てくてく座」のお芝居

●飯野和好(座長・ねぎ家朝太郎)

絵本学会のイベントをきっかけに、私の仲間達と一緒に「てくてく座」復活公演が出来た事は本当に幸せでした。メンバーも新たにして珍しい曲芝居(浪曲入り)に挑戦してみました。やはり芝居はかつらをつけて演るのが実に楽しい! 殺陣や振り付けも楽しい! 山鹿の「風吹きからす」のスタッフや市の職員さん、ボランティアの皆さん、地元の方の大道具を作つて頂いたすごい力! 手拭のデザインや看板、チラシの作成等、本当に大勢の人達のおかげで本格的な芝居小屋「八千代座」で舞台を務める事ができたのです。それに何より九州一帯、近県遠方から続々と出掛けて下さった方々に大感謝です。また八千代座で演りたいと強く思った一日でした。

●長野ヒデ子(みょうがのせんた)

第15回絵本学会山鹿大会の言い出しちゃうであります私は、八千代座の魅力と、地元で絵本が大好きな「風吹きカラス」のメンバーの実にすばらしいお力を借りし、絵本の手渡し手、研究者、編集者、作家が一つになって、本当に大事なものは何かを共に感じあいたいと思いました。八千代座ならお芝居! 研究発表やシンポジウムも大事だが、それ以上に意味があると! 呼びかけたら「一肌脱ごう!」と集まってくれたではありませんか! 日頃馴染みの絵本作家たちが、なんとお芝居をということで、遠くから駆けつけてくれました。「てくてく座」は絵本そのもの! 生身の絵本作家がこんなに楽しんで真剣にアホなお芝居を演じるのですから、これぞ「ほんまもの子ども本にかかる一座」。大道具もすべて地元もみなさんのお力です。

このお芝居で絵本学会を絵本樂会に変身させてしまいました。コワイことですよねえ。



●あべ弘士(鬼ぐるみのごんぞう)

鬼ぐるみのごんぞう役は実に楽しい。悪の限りをつくし、若い娘を手ごめにし、やりたい放題である。実生活だとしたら刑務所送りだろう。それを舞台とはいえやっちゃんであるから楽しいのなんの。しかし、ひとつだけ気に入らぬことがある。最後に朝太郎に切られるのである。生きのびて、もっと悪事を続けたい。台本変えてほしい。

●ささめやゆき(茶屋のばあさん おしか)

10年前てくてく座が山鹿の八千代座で公演しましたが、その時あたしは台詞のない黒子でした。昔のことくわしくは憶えていませんが、舞台を走り回ってすべて転んで笑いをとったことが頭のすみにのこっています。なんとか役者は三日やつたらやめられないとききますが、それなんでしょうか。今回またまた八千代座にもどってきてしまったというのは。

ふだんこどくな作業をしているもの同士があつまって、ひとつの劇をねりあげていくことは通常にはない嬉びでした。飯野座長の発案ではじまついたいわば絵本作家劇は昔の文士劇みたいなもので、絵本作家のもう一面を見ることができて読者の方は面白かったんだろうなと思っています。

●中川ひろたか(旅の薬売りせんじろう)

時代劇好きが高じて、劇団を作つた飯野和好さん。元来目立ちたがり屋な絵本作家たちを口説いてお芝居を打つたのが、10年前。3度の公演を各地で行ったあと、長い冬眠に入っていた。昨年、長野ヒデ子さんが絵本学会の幹部になり場所が、八千代座に決まった時、長野さんは思い出した。

10年前、チョウチョとばす役でもいいから出させてほしいと飯野さんに懇願し、あっさり断られたことを。お芝居がしたい、八千代座の舞台に立ちたい、長野さんの熱い思いが、飯野さんに届き、てくてく座の再結成と相成った。てくてく座は、二人の情熱が原動力になっていると言っても華厳の滝ではない。

●長谷川義史(馬さしのみの吉)

てくてくてくてく。てくてく座。てくてく座のお芝居です。絵本作家に絵本にまつわる人たちの一巻です。ぼくが絵本デビューするまえに旗揚げしてますね。知りましたよ、いいな~羨ましいな~絵本作家の劇団か~とね。

そんな楽しそうなお芝居に出てみたいな~ってね。そしたら今回なんと座長の飯野和好さんから「出ませんか?」ってお誘いが。や一嬉しいことでした。

稽古がはじまると大阪から東京へ通うのは大変でした。でも望んでいたことですもんね。

本番の日の舞台。幕が開くとみんなドッカンドッカン受けています。これは受けねばと大阪人の血が騒ぎ。言ってはいけないアドリブを連発。終わって怒られました。座長の飯野さんにじゃなく、鬼ぐるみのごんぞうことあべ弘士親分に。

●山本孝(しょうがゆのつる吉)

僕が初めて「てくてく座」で八千代座の舞台に立たせてもらったのは11年前・・・。まだ上京したばかりで絵本の仕事をしておらず、ただ暇なのと、学生の頃剣道をやっていたという理由で座長の飯野さんにお声をかけてもらったのがきっかけでした。

そして 11年後…再び「てくてく座」の座員として、しかも思い入れのあるこの八千代座の舞台に、絵本作家として立つ事ができ、感無量の思いと、少し強すぎたステージのスポットライトのせいで、まともに客席が見れなかった事を覚えています。そしてもうひとつ嬉しかった事…それはちゃんと僕にも台詞があった事…でした。

●大友剛(ピアニスト、マジシャン／山鹿の八太郎)

待ち遠しい！その日が来るのがこんなに待ち遠しいのは、子どもの時以来かもしれない。八千代座での公演で僕はすっかり虜になってしまった。

飯野さんの脚本の面白さはもちろん、個性的な絵本作家さん達がまじめに楽しんで演じる芝居。一流の人たちが集まって、超まじめに楽しむって本当に凄い。しかも、配役的には僕が主役！日本の絵本の世界を創って来た絵本作家さんたちを差し置いて！

劇中では、鍵盤ハーモニカを演奏したり、マジックをしたり、チャンバラしたりと、好き勝手やらせてもらっています。そして、強烈なキャラの絵本作家さんたちが作り上げる舞台は奇跡の大スペクタクル・スーパーミラクル・ステージ！はっきり言ってぶっ飛んでます！東京公演も八千代座同様、お揃り、屋号が飛び交い、観客と演者が一体になる夢の世界が待ち遠しい！

●丸山清乃(絵本館 編集者／お千代)

三月初旬、座長の飯野さんから「村娘役」と声をかけていただき、上司の許可もあり参加させていただくこととなりました。

初めのうちは、大そうなことを引き受けてしまった、と不安でした。お芝居と言えばもっぱら観るほうで、最後に役を演じたのは小学六年生の頃に友達と作っていた8ミリビデオドラマの探偵役。まさに22年ぶりという頼りないものです。それからお稽古に参加するうち「間違いなく日本の宝である絵本作家陣と一緒に、八千代座という歴史ある素敵なお芝居小屋の舞台に立つ」ということが、どれだけ特別でまたとないことか！という事実に、腹をくくった次第です。前日舞台稽古では、自分のお芝居があまりに良くなくて非常に焦り、今思えばこの時が不安と緊張のピークでした。

いざ本番、八千代座の舞台には、舞台経験のない私でも感じる「何か」があり、全員、自分も含めこれまでで一番のお芝居だったように思います。幕が閉じたあの、座員同士のハイタッチは忘れられません。また、絵本館のスタッフが全員で応援に駆け付けてくれたのも、心強いことこの上ありませんでした。2012年6月2日は、一生の記念に残る一日となりました。

●小林美香子(小峰書店 編集者／おめん)

てくてく座再開のお話を伺ったのは、晩秋の秩父のことでした。お芝居の内容は未定で、当然、どんな役柄かもわからないまま、知られたことは「稽古は1回ぐらい」ということでした(その唯一の情報が間違いだったとは…。

冬になり、届いた台本には、作家さんたちのお名前がすらりと並んでいました。そして、演じることになったおめんの台詞の傍らには、「体を大きさにくねくねさせる」の指示。なんだか大変なことを引き受けてしまったと不安になってきました。と同時に、お



忙しい作家さんたちが、台詞も多く、殺陣もあるお芝居を演じきることができるのか、心配になりました。

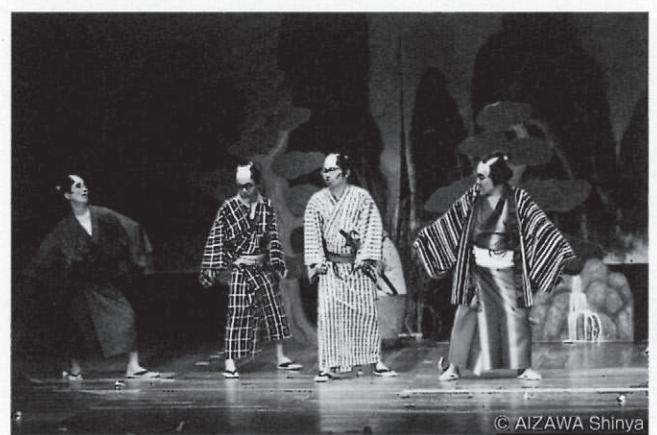
ところが、作家さんたちは、どんなにセリフが長くても、稽古場までが遠くても、毎週のように稽古があっても、何度もダメ出しされても、台本がかわっても、妙な動き(!)を要求されても……どんなときも楽しむ、とにかく楽しむ、ひたすら楽しむ！楽しもうという思いに圧倒されるほどでした。作家さんたちの生み出す絵本作品が魅力的なのは、楽しむ心が作品に溢れているから…。八千代座というすばらしい舞台を踏むことができ、さらに創作の秘密を垣間見るという貴重な経験をさせていただきました。

●中村宏平(ほるぶ出版 編集者／お地蔵さん)

読み聞かせやワークショップ、音楽活動など、絵本作家が絵本制作以外の表現活動を行うことは珍しいことではないですが、今回のてくてく座のような、おおがかりなお芝居となると、そうお目にかかるものではないと思います。そんな、てくてく座の舞台に、まさか自分が立つことになろうとは、夢にも思っていませんでした(実際にはずっと座っている役ですが)。

でも地蔵役として舞台にあがることで、普段は自分の内側と向き合いながら創作活動をしている作家さんたちが、集団での表現行為である芝居をどのように「創作」していくのか、それを間近で見ることができたのは、なんとも面白く贅沢な時間でした。

そして、本番。すばらしいお千代座という舞台でお芝居は大喝采。おひねりや、屋号のかけ声まで頂いて、色々な意味で、本当にてきてきな経験をさせてもらえた時間でした。



© AIZAWA Shinya

研究発表

研究発表 A室 大会1日目(八千代座交流館)

座長: 今田由香

第1日目A室では、絵本の読み聞かせに関する2つの研究が発表された。

伊東久実さんによる「イギリスに学ぶ『読み聞かせの会』のアクティビティー」は、おはなし会・読み聞かせ会の活動を充実させるための方策を検討すべく、イギリスと日本で調査した結果の報告であった。

特に参加者の関心をひいたのは、「サーカスター」と名付けられた2011年度、英国政府が展開したプロジェクトである。子どもたちが6冊以上の本を、遊びながら読み進められるように、全英の図書館に専用のステッカーやシートが配布され、webサイトを使ったゲームなども用意し、メディアを駆使した読書支援活動が行われた。その結果、75万の児童が参加したという。さらに国内の例として、千葉県の保育所で行われている絵本を題材にした遊びとその効果が紹介された。保育や教育の場、そして図書館でも展開できる活動が多様にあると知ることができた発表であったが、参加者から、「楽しく遊んだのちに、子どもがどのように絵本に戻ることができるのか」、「月齢によっては遊びと絵本のつながりを理解できない子どももあり、アクティビティーの後の読書習慣の形成が難しい」など、重要な意見や質問がだされた。アクティビティー実施の効果については、縦断的な研究も必要であろう。

2つ目の発表、岩田英作さんとマューあきさんによる「おはなしレストラン、はじまるよ! -読み聞かせによる人間力の育成」は、所属大学で展開する絵本の読み聞かせを通じて、学生の総合的な人間力の育成に関するプロジェクトの報告と、学内に設置された絵本専門の図書館の紹介であった。

さながら教育免許履修課程のように、読み聞かせ活動に臨むための学習をし、地域と交流する中で知識や技能だけではなく、学生の社会性を育てていく、それを単位化するという活動の紹介に、図書館や教育の現場にいる参加者から、活発な質問が有り、活動への賛辞が述べられた。

現代の子どもにアピールする仕掛けを盛り込んだ英国政府の活動、読み聞かせを通じて学生を育てるという大学のプロジェクト。



今回の2つの発表は、いずれも新しい発想が光る実践の報告であり、子どもの読書活動の支援に関心をもつ参加者にとっては、貴重な情報提供の場ともなったようだ。

●イギリスに学ぶ「読み聞かせ会」のアクティビティー

伊東久実(身延山大学福祉学科こども学コース 准教授)

本研究では、公共図書館等で行われるおはなし会・読み聞かせ会の充実のさせ方を検討する。乳幼児を対象とした定期的なおはなし会の意義を再確認し、これまで、聞かせる・見せるといった観客的活動を参加型・双方向型活動への転換を提案する。そのために英国のライムタイムでのアクティビティーの実践例を現地において取材し、その内容について報告する。

英国で全国規模で行われるアクティビティーは、各図書館において図書館員と子どもが1対1で行われることに特徴がある。一人ひとりの子どもと絵本に関する楽しいあそびを行うことは、信頼関係を築く大きな手段となっている。また、ローカル・アクティビティーはグループ単位で行われ、絵本とつながる遊びが提供される楽しい場として位置づけられている。子どもたちは聞き手に留まらず、図書館員と双方向で絵本に関連した遊びを展開している。図書館員は、子どもたちを本の世界へ誘うばかりでなく、家族のコミュニティー参加も推奨する。アクティビティーで築いた子どもとの関係を元に、識字問題をはじめとする家族全体がかかわる福祉の問題にも貢献している。イギリスでは、図書館のアクティビティーの充実は、すべての子とその家族の幸福に貢献し、地域福祉としての大きな意味を持つのである。

次に、絵本とつながる遊びが絵本を読むことにどのように影響するかを考察する。そのためブックスタートの趣旨を保育に取り入れた保育所の実践記録を分析する。絵本を読み聞かせるだけでなく、絵本から広がる楽しいあそびを積極的に取り入れることによって、絵本と子どもたちの関係は持続し、絵本に対する新たな興味を喚起することが実証されている。

我が国の乳幼児のおはなし会の内容充実を考える時、司書と親子たちとの双方向のやり取りができる、絵本につながるあそびの導入が有効と考える。そして、国をあげて各図書館の取り組みの情報交流により、会を発展させることができるとと思われる。

●おはなしレストラン、はじまるよ!

—読み聞かせによる人間力の育成—

岩田英作(島根県立大学短期大学部総合文化学科 教授)

マューあき(島根県立大学短期大学部総合文化学科 教授)

島根県立大学短期大学部では、平成18年度より絵本の読み聞かせを通して学生の総合的な人間力の育成に取り組んでいる。発表では、その取組について報告すると共に、平成22年度に学内に設置した絵本専門の図書館「おはなしレストランライブラリー」について紹介したい。

読み聞かせの授業は、もともと総合文化学科で行なっていたものであるが、平成21年度に文部科学省より大学教育推進プログラム(GP)に選定され、それを機に取組の規模を大幅に拡大することができた。平成22年度からは、総合文化学科に保育学科、健康



栄養学科を合わせた3学科共通科目「読み聞かせの実践」(1年前期・後期)を開講し、多くの学生が受講している。5人のスタッフ(教員3名、アシスタント2名)で担当し、学生は、絵本選び、読み聞かせの練習を経て、大学近隣の幼保園、小学校で子どもたちの前に立つ。そこから課題を見つけて次の実践に役立てる。その繰り返しの中で、学生は絵本や人間に対する理解を深め、表現力やマナーを身につける。

総合文化学科の卒業プロジェクト「おはなしゼミ」(2年通年)では、定期的な読み聞かせのほかに、「出前シェフ」にも取り組んでいる。これは、地域からの要望に応じて学生が読み聞かせに出かけていくもので、初めての場所で初めての対象を前に行なう場合がほとんどで、その場の臨機応変な対応力が求められる。

おはなしレストランライブラリーは、絵本を中心に児童図書に特化した図書館で、専任司書2名が担当し、現在の収蔵図書は約7000冊である。読み聞かせの授業に利用するほか、平成23年度からは広く一般にも開放し、貸出も行なっている。月に1200名以上の利用があり、その3分の2は一般市民の方々である。絵本の選定については、比較的以前から読み継がれているものを多く取り揃え、ライブラリーの利用については、小さなお子様の安全と利用者の皆さまへの丁寧な対応を心掛けている。

研究発表 B室 大会1日目(八千代座新楽屋)

座長：杉浦篤子

B室の発表は、吉田久実さん「絵本からはじまる劇的活動についての一考察」一件であった。

吉田久実さん「絵本からはじまる劇的活動についての一考察」
保育の場での日常的な活動の中に、マーシャ・ブラウン絵の『三びきのやぎのがらがらどん』を読み聞かせから始めて、発表まで子どもたちと原作を読み込んでいく上の工夫と、子どもたちの変化、成長が認められる点についての考察を発表した。名作が持つ魅力が、子どもたちにも伝わり、時には原作がさらに変化する時があるほどの活動が広がった、ということは興味深いものがあった。しかし『三びきのやぎのがらがらどん』の何が、子どもたちを楽しませたのかという、原作に対して、絵本に対しての分析、考察がもう少し欲しかったと、欲を言えば望みたいところであった。

●絵本からはじまる劇的活動についての一考察

吉田久実(白梅学園大学・短期大学 助教)

北欧民話『三びきのやぎのがらがらどん』(1965、福音館)は、人気の高いロングセラーの絵本であり、物語である。絵本の中の絵や選ばれていることばが大変魅力的であり、読み聞かせの絵本としての人気もあるが、同時に、保育の場において、様々発表会の劇の演目としてこの物語が取り上げられることも大変多い。物語の山場に向けて徐々に盛り上がるシンプルで、且つ、繰り返しなどのリズムの良いストーリー展開は、正に劇的であり、年齢の小さい子でも身体ごと物語に参加することが出来る。発表会でクラスの出し物に劇をと考える保育者は、クラスの子どもたちが、全員、出来るだけ平等に参加し、顔も見え、セリフや歌など、見に来る保護者に子どもたちの成長を見てもらうために様々工夫する。この「全員」「平等」の子どもたちの出演を実現しやすい物語であることは発表会の劇に取り上げられる重要なポイントであり、この物語は条件に合いやすいと言える。

筆者は、自身の保育経験の中で、発表会へ向けての取り組みでなく、絵本『三びきのやぎのがらがらどん』の読み聞かせから、劇的活動をした。お客様に見に来らうという目標はなかったが、子どもたちも保育者も、日常の保育室で、絵本『三びきのやぎのがらがらどん』から劇を創作し、劇を遊んだ。そこでは、子どもたちの想像力、言葉や身体表現の工夫が發揮され、保育者が思いつかなかった劇的ストーリー展開を創りだした。絵本の原作からは少し離れるストーリーになったものの、子どもたちの遊びとなっていた。

子どもたちが、絵本から新たに遊びを創り出す力を引き出すこの絵本作品の魅力と、絵本から子どもたちと共に、劇という遊びにつなげていくことの魅力について考えてみたい。

研究発表 C室 大会1日目(八千代座)

座長：香曾我部秀幸

初日の研究発表(C室)は、八千代座の劇場において行われた。明治以来の伝統ある芝居小屋の舞台上で玉三郎と同じスポットライトを浴びながらの研究発表は学会初の試みであり、発表者にとっても生涯あり得ない体験であったと思う。

・神戸洋子(帝京科学大学こども学部こども学科教授) 氏の「いのちのぬくもりを伝える」ということ一マリー・ホール・エット『わたしとあそんで』と動物介在教育一は、絵本愛好家なら誰もが親しんでいる作品を、「動物介在教育(AAE)」という近年とくに獣医師界において提唱され始めた新しい概念によって分析を試みたものであった。AAEとは、動物と直接ふれあうことで、命の大切さ、動物への思いやり、責任感などを学ぶ、「子どもの心を育む」ために動物を活用しようという教育法であり、この作品では、主人公の少女が、動物と身体を触れ合い交流すること、つまり動物の体温、心臓の鼓動等に直接触れることで、他者を愛すること、コミュニケーションをとることの基本を知るという理念が描かれている、と結論付けている。分析の基本をなす AAEについての理解を深め今後より一層精密な考察がなされることが求められる。



・正置友子(絵本学研究所主宰) 氏の「子どもがはじめてひとりで橋を渡るとき—リミナリティ論をもとに絵本『三びきのやぎのがらがらどん』を読む—」も、文化人類学における「リミナリティ」という概念を用いてマーシャ・ブラウンの不朽の名作を新たに考察しようとする試みであった。「リミナリティ」とは、生きる過程で、ひとつの状態からもう一つの状態へ移行する期間・段階を示すもので、3匹のヤギがトロルの住む谷川にかかる橋を渡ることが各々の子どもの移行段階であり、読者の子どもたちは、橋を渡るヤギに自己を託して自己の成長を確認することができる指摘した。発表時間の制限のため、肝心の「リミナリティ」についての言及が充分ではなかったことが惜しまれる。

2組ともに八千代座の舞台と客席天井の装飾の華やかさに相応しく、学際的な着眼に斬新さが感じられる内容であった。

●いのちのぬくもりを伝えるということ—マリー・ホール・エット『わたしとあそんで』と動物介在教育—

神戸洋子(帝京科学大学こども学部 こども学科 教授)

エットは幼い頃、自然に囲まれて育った。『わたしとあそんで』では、女の子が自宅から見える場所にある原っぱで、小動物たちと交流する様が描かれる。登場するのは、ばつた、かえる、亀、りす、かけす、兎、へび、水すまし、そして野生動物、鹿の赤ちゃん。

追いかけると、皆逃げてしまうが、池のそばで腰を下ろした女の子がじっとしていると戻ってくる。壊れた柵を越えて闖入した鹿の赤ちゃんは、そばに寄って来て女の子のほっぺたをなめる。それは、女の子にとって躍り上がらんばかりの喜びであった。

動物と身体を触れ合い交流することは、いのちのぬくもりを直接体験することとなる。動物の体温、心臓の鼓動等に直接触ることで、他者を愛すること、コミュニケーションをとることの基本を知るのである。

また、近年コンパニオンアニマル(身近な動物を伴侶や家族、友達と同様に位置づけたもの)とのふれあいが子どもたちに与える影響を明らかになった。子どもたちの道徳観、精神的人格的成長の促進、幼稚園・学校などのコミュニティにも恩恵をもたらすという報告がなされている。この活動は動物介在諸活動のひとつ、動物を教材として用いる「動物介在教育」Animal Assisted Education(AAE) と呼ばれる。動物との関わりを通して子どもの

自主判断能力の向上、集中力の増加、共感性の増加などが報告され、動物を「子どもの心を育む」ために教育的に活用しようという試みである。動物と直接ふれあい知識を深めることで、命の大切さ、動物への思いやり、責任感などを学ぶことができる。

動物と子どもたちが触れ合う場では、動物の側も不安があり、遊び疲れることがあるのだと動物の側に立った考え方必要である。

『わたしとあそんで』は、女の子が追うと逃げる生き物たちが描かれ、静かに息をひそめていると彼らの方から寄ってきてくれ、ほっぺたまでなめてくれる。動物の側の気持ちまで、子どもたちに伝えることが出来る。AAE活動の導入、動物との付き合い方の基本を理解することのできる絵本である。

●子どもがはじめてひとりで橋を渡るとき—リミナリティ論をもとに絵本『三びきのやぎのがらがらどん』を読む—

正置友子(絵本学研究所 主宰)

人間は、誕生から往生の時まで、生きることの痛みを伴う経験をするように予定されています。人生の途上で思いがけない不幸が襲い掛かることがあります、一方、ひとつの人生を生きるだけで、越えなければならない「リミナリティ」があります。「リミナリティ」というのは、生きる過程で、ひとつの状態からもう一つの状態へ移る時の、移行期間もしくは移行段階、あるいは両方をさします。

「リミナリティ」という用語は、文化人類学において通過儀礼を研究する段階で使われるようになりました。子ども時代(社会)からおとな時代(社会)への移行の儀式を代表例とします。しかし、通過の儀礼は、子どもからおとなへの移行期だけに限られたものではないことを、A. V. ジェネップ(A. V. Gennep 1873-1959)は、その著『通過儀礼』(秋山さと子・彌永信美訳 新思索社 1997。原著出版 1909)の中で次のように書いています。

一つの特殊社会から他の特殊社会へ、またある状態から別の状態への通過は、生きているという事実の要請によるものであるから、人の一生は同じような始まりと終わりを伴う一連の各段階の継続によって成立している。(p. 9)

ジェネップが列挙している一連の各段階をまとめてみると、次のようにになります。誕生、幼年期、思春期、婚約、結婚、妊娠、父親になること、階級昇進、職業的専門化、死、葬送などです。日本の現代における通過の段階としては、ここに、進級、進学、受験、転校、転任、退職、定年も含むでしょう。確かにどの段階も、「生きている」という事実の要請によるものです。

今回の発表では、マーシャ・ブラウンの絵本『三びきのやぎのがらがらどん』(瀬田貞二訳 福音館書店 1965年。原作出版は1957年)を中心に、子どもたちが幼児期から児童期にかけて経験する「リミナリティ」を考えます。liminalityという語はラテン語の「敷居」を意味する“limen”に由来しますが、リミナリティ期にある子どもたちにとっては「敷居」というよりは、時には暗いトンネルになり、時には深い谷川にかかる橋(その下にはトロルが住んでいる)にもなります。橋を渡りきったとき、子どもたちは、生きる上で貴重な体験をしたことになり、新たな勇気に支えられて、次の冒険へと旅立つことができます。

研究発表 A室 大会2日目(八千代座交流館)

座長: 中川素子・今井良朗

「Robert McCloskeyの作品における Lineの効果」を発表した中山美加は、ロバート・マックロスキーの『Make Way for Duckling』の線描写の巧みさについて発表した。丁寧な発表であったが、発表者が研究の根拠としている Lyn Ellen Lacyの分析と発表者自身の考えの区別がはっきりしないという指摘が会場から寄せられた。

「宇野亜喜良の絵本—表現の変遷と特徴」を発表した松本育子は、2010年開催の宇野亜喜良全貌展準備のための作品調査をもとに、作品を4つの時期にわけて分析した。多くの資料を駆使した発表は、絵本研究に美術館が果たす役割と力を見せたが、会場からは説明についての間違いが2点、指摘された。

「写真絵本の可能性 1—写真と絵画の特質」を発表した鉢呂光恵は、写真と絵画という異なった表現の特質の比較を通して、写真絵本の可能性について考察した。写真と絵画のコラボレーションをテーマにした考察は興味深い。しかし、会場から指摘があったように写真絵本を中心に見ていくのか、写真と絵画の特質の違いからくる表現の可能性を見ていくのかが明確ではなかった。写真表現の多様性を含め、新たな考察が期待される。

「絵本の言葉における類似性について—絵本『がたごと がたごと』の言葉を中心にー」を発表した村上康子は、絵本の構成要素に注目し、『がたごと がたごと』の主要な言葉「がたごと がたごと」の言語学的特徴とその働きについて、読者の実態調査に基づいて分析した。言葉と現象の結びつき、オノマトペの類似性などから絵と言葉の相乗効果について提示した。丹念に調査されているが、地域性や文化性を加えるなど、調査の対象を拡げることによる可能性も指摘された。

「パラレル・ユニバースによる絵本分析の試み」を発表した趙峰一は、アンネゲルト・フックフーバー作／絵の『友だちのほしかった大おとこの話+友だちのほしかったネズミの話』を物理学の「多世界解釈」により分析した。多時間軸を整理された画像でわかりやすく解き明かしていく、興味深かった。他領域の用語を入れこむことにより、絵本解釈が深まる可能性をみせた発表といえる。

線描写や視線(見える線・見えない線)からの考察、一人のイラストレーターの豊富な資料に基づく調査研究、写真絵本からの考察、言語学からの分析、物理学の観点からの解釈など、全体に絵本表現の研究が周辺領域や横断的考察に拡がっていることは好ましいことであり、今後の研究に可能性を感じる。

(文責: 中川素子・今井良朗)

● Robert McCloskeyの作品における Lineの効果

中山美加(フェリス女学院大学大学院)

絵本のイラストにおいて、線描写は重要な機能を果たす要素の一つである。それゆえ、絵本の描写は線によって大きく左右されるといえる。視覚メディアの専門家であり、アメリカ図書館協会の会員でもある Lyn Ellen Lacy (生没年入れる) は、その著書 ART and Design in CHILDREN' S PICTURE BOOKS (出版



年入れる)の中で、コールデコット受賞作品のイラストを取り上げ、これらのイラストを Line, Color, Light and Dark, Space の各項目で分析している。アメリカのロバート・マックロスキー(Robert McCloskey, 1914-2004) は、Make Way for Ducklings (1941)と Time of Wonder (1957)で二度のコールデコットを受賞しているが、Lacyは、これら二作品における、Lineの効果についても興味深く論じている。

本発表では、彼女の線描写による分析を参考に、McCloskeyのイラストを本発表者が分析した結果を述べてみたい。更に、Lineによって、彼のイラストにどのような効果が産み出されているのかを発表したい。

Lacyは、線を Visible Lines(見える線) と Invisible Lines(見えない線) の二つに分類し、更に、Horizontal(水平線)、Vertical(垂直線)、Diagonal(対角線)、Closed circular(円状に囲む線) という異なる 4種類の Lineを、彼の三枚のイラストに当てはめて論じている。筆者はそれらの Lineが、各イラストの中でどのように影響し、またどのような意味を持つのかを解説したい。

また、Lacyは、線描写に関しては細い線、太い線、連続する線、途切れた線、左から右へと伸びた線、あるいは、線によって区分された空間を前景、中景、背景とに分ける線、また水平線と垂直線の交わる中心地点で、構図の対称、非対称のバランスが保たれていると説明している。さらに、Lacyは、あらゆる種類の線に存在価値を見出している。

McCloskeyの作品が年月を越え、現在に至るまで読み継がれている理由の一つに、Lineの効果が深く関わっていることは明らかである。幼い子どもに向けて描かれた作品ではあるが、McCloskeyが培ってきた技術は、彼の作品のテーマである「自然との共存」の中で日常を描くことにより存分に活かされ、今なお揺るぎない安心感を与え続けている、といえるのではないだろうか。

●宇野亜喜良の絵本—表現の変遷と特徴

松本育子(刈谷市教育委員会生涯学習部文化振興課専門員)

戦後日本を代表するグラフィックデザイナーであり、イラストレーターである宇野亜喜良(1934年ー)。彼は、1950年代から絵本作家という立場ではなく、イラストレーターとしての範疇に留まりながら、今まで 50冊以上の絵本を発表してきた。筆者が勤務する刈谷市美術館において、2010年に開催した初の全貌展準備のため 14,000点を上回る作品調査を行った。その調査は、宇野の初期から現在に至る膨大な数の絵本原画を間近にできる絶好の機会であった。調査を通じて、絵本という出版物を生み出す

ために制作される原画からは、技法や材質、線や色彩、質感などの造形要素といった表現を特徴づける貴重な情報を直接的につかみ取ることができ、それらの情報は翻って出版物となった段階からはすべてを把握できないことを再認識した。展覧会終了後に約550点の作品を収集することとなった美術館の学芸員が行うべき研究の第一段階として、原画そのものに着目することは、コンディションデータをまとめる上でも有効であると考えた。

従って本発表では、刈谷市美術館のコレクションとなった原画を中心に絵本以外の子ども向け出版物のイラストレーション原画も対象に含め、「絵本に関しては格別これがやりたい、という発想はないけれども仕事の話があった段階で、自分の興味のある方向へ持つていけたら」と自作絵本にこだわらない特有な制作姿勢を貫いてきた宇野亜喜良の絵本について、原画調査で得た情報を分析し、その表現の変遷と特徴を具体的に考察したい。

時代区分としては、1956年からグラフィックデザイナーとして仕事を始めた宇野の制作年代を4期(第1期: 1950年代、第2期: 1960年代、第3期: 1970~80年代、第4期: 1990年代以降)に設定した。宇野が独自の造形性を深め、いかに表現のバリエーションを拡げ、さらなるステージへと飛躍を遂げてきたか、そのありようを検証する場としたい。

●写真絵本の可能性 1—写真と絵画の特質

鉢呂光恵(藤女子大学非常勤講師)

写真を媒体とする絵本には、自然の動植物の生態をリアルに伝える科学絵本や、物語の主人公を子供や手作りの人形として登場させる絵本、さまざまな仕事を紹介する絵本等がある。

19世紀初頭にフランスで発明された写真は、太陽光の物理的・化学的な作用を直接的に生かした画像を誕生させ、私たちの視覚の世界を広げた。写真は、今日では、世界中の出来事を素早く伝える広範なメディアを形成している。

写真と絵画は、異なる視覚媒体である。絵画は画家の心的なイメージを羽ばたかせることによって、時間や空間を超える存在である。写真はシャッターを押すその瞬間を切り取った断片ではあるが、被写体の持つ一側面を事実として映し出す。

『パリの青い空』図という、写真と絵をマッチングさせた絵本がある。猫を見ているうちに母親にはぐれてしまった男の子が青い鳥と共にパリの街を彷彿し、無事に自宅に帰りつくまでを綴っている。白黒写真の歴史的街並みを背景に、鳥や子どものセーターと靴には写真の上から直に鮮やかな青を彩色し、子どもの不安な心と、彼に寄り添う想像上の青い鳥を強調する。ここには、写真と絵画の特質が違和感なく共存している。絵本を見るものの日常・体験を写真によって呼び起こしながら、お話の世界のイメージを広げているのだ。

写真には、被写体と同時に撮影された古い家具や被写体の足元の影等の、かつてそこに在った何気ない光景が映し出されるという特質がある。鑑賞者は、写真を眺めることによって、画像の中に、忘れかけていた思いがけない記憶や、自らの原風景を思い出し、それが新しい意味を持つもつものとして再び甦ってくるという心の動きが自覚されてくるのである。

今発表では、写真と絵本という異質な視覚媒体の比較を通して、写真絵本の可能性を考えてみたい。

●絵本の言葉における類似性について

村上康子(九州大学大学院芸術工学府 芸術工学専攻 博士後期課程)

絵本は絵と言葉の相互作用によって成り立つ本であり、一定の主題に従って比較的短い作品で制作者のメッセージを伝える媒体である。絵本は、一般に子供の教育や娯楽のためのものと考えられているが、社会の様々な分野で受け入れられ、多数出版されている。絵本のテーマや表現方法は多様であるが、その中に、明確な物語はなく、受容者が自由に想像して楽しむ『がたごと がたごと』という題名の絵本がある。この絵本を見ると、

「おきゃくが のります ぞろぞろ ぞろぞろ

がたごと がたごと

がたごと がたごと

がたごと がたごと

おきゃくが おります ぞろぞろ ぞろぞろ」

(引用: 内田麟太郎・文 西村繁男・絵 1999『がたごと がたごと』 童心社)

という言葉が15見開きで3回繰り返される。但し、14見開き目は絵のみで言葉はない。この絵本の言葉の中で「がたごと がたごと」の果たしている役割は大きい。

絵本の主な構成要素は、絵と言葉と伝達方法としての音読が考えられる。

本研究の目的は、絵本の構成要素に注目し、絵本『がたごと がたごと』の、主要な言葉である「がたごと がたごと」の言語学的特徴を明確にし、その働きについて探求することである。

研究方法は、主として読者の実態調査結果に基づいて分析考察を行った。

結果の概要は、以下の通りである。「がたごと がたごと」は、</gatagoto />の音韻形態を持つ4拍の言葉の反復形であり、典型的な日本語オノマトペの型を持つ。言葉の意味する内容は、重い物が他の物と触れ合うときの音や電車などがレールの上を走るときのリズミカルな音をさし、電車や汽車などの動きの様子や音を表現する言葉として使われる。『がたごと がたごと』における「がたごと がたごと」は、文成分としてだけではなく、臨場感音響効果など媒体としての絵本の特徴と結びついた働きをし、絵と言葉の相乗効果を生み出す重要な役割を果たしている。音と意味の結びつきが強く類似性のある言葉は、絵本の特徴と相俟って効果的に使われる

●パラレル・ユニバースによる絵本分析の試み

趙崢一(京都造形芸術大学大学院 芸術研究科 芸術専攻博士課程)

「パラレル・ユニバース」とは物理学における解釈問題の一つであり、ヒュー・エヴェレット三世(Hugh Everett III 1930—1982)が提唱した「多世界解釈」に由来している。一般的には、日常におけるごく自然な選択行為により、世界が枝分かれし、自

分の「分身」がどこかで存在するという考え方として知られる。このような考えは、人々を瞬時に世界のいわゆる「中心」(centrality)、あるいは「優位」(supremacy) という立場から追い出し、世界に対するより客観的な見方と、「他者」の存在を再認識させる。

本研究では絵本の構造分析に「パラレル・ユニバース」という概念を持ち込み、新たな解釈を試みる。絵本の物語から「多時間軸」を見いだし、それぞれの「時間軸」が絵本という「宇宙」で「並行関係」あるいは「平行関係」を成立させる、と考え、互いに「パラレル・ユニバース」として構成されることを前提に分析を行なう。

絵本における時間表現には特殊性がみられる。書物メディアである絵本の場合、ページを捲るという行為が伴われることによって、読者自身も物語の構造の一部であると考えられる。他方、絵本は「絵」と「言葉」両方の働きで構成されるため、他の書物メディアと比べ、ページの展開で「絵」による独特な「時間の流れ」が生じる。それゆえ、「並行関係」あるいは「平行関係」を認識するため、読者が「読書」という行動を行うと同時に「参加者」や「観察者」、または「思考者」などのさまざまな立場、または立場の転換がみられる。「パラレル・ユニバース」による分析が、絵本における時間の表現手法を再認識させ、絵本のメディア特性をより明確化することを期待したい。

今回の発表では、「パラレル・ユニバース」の概念をみることができる絵本数点を具体的な事例としてとりあげ、その分析結果を発表する。

研究発表 B室 大会2日目(八千代座新楽屋)

座長：松本猛・大橋真由美

2日目B室の研究発表は、計5名であり、内4名は、絵本史研究に分類される。残り1名は、新しい視点の発表であった。

細川七重さんの発表は、敗戦間もなく米国教育視察団から贈られた絵本についてであった。本発表は、これまでに別の研究者によって報告された内容に留まるものであり、オリジナリティーのある研究として、どのような方向に向かっていくか、今後に期待したい。

浜崎由紀さんの発表は、戦前の『キンダーブック』付録『ツバメノオウチ』に関する共同研究の一環としてまとめられたものであった。歴史研究は、資料整理に多大なエネルギーを割かざるを得ず、その意味に於いて、本発表は、その第一段階を手堅くまとめていた。形式面から分類したものを、内容面から分析し、比較検討することを、今後に期待したい。

生駒幸子さんの発表は、光吉夏弥による戦中・戦後の翻訳絵本を取り上げ、「左開きヨコ組み」の

原書から「右開きタテ組み」の日本語版に翻訳された際の問題点を指摘するものであった。フロアーから、日本語絵本を諸外国語に翻訳出版する際の現代的課題として、組版変更の可能性を探る必要性が指摘された。本発表は、歴史研究が現代的課題への回答にもなりうることを示す内容であった。

廣田真智子さんの発表は、こぐま社の絵本に関する共同研究の一環として、赤ちゃん絵本を巡り、「絵本読みの実践」を踏まえた内容であった。こぐま社の赤ちゃん絵本の概要、実践テキストの概要、実践記録など、情報量は豊富であったが、焦点が絞り切れていない感もあった。実践の記録方法に関する質問に対して、迷いがあったことが回答された。

村中李衣さんの発表は、矯正施設に於ける絵本の読みあいを通して、受刑者が家族に向けて絵本を「声」に出して読むことの意味を問うものであった。開かれた母音[a]と[o]が感情に働きかけ、他者への見つめ直しを導くことが示された。(文責 大橋)

●米国教育使節団からの「本の贈り物」(Gift of Books) のなかの絵本

細川七重(関西学院大学大学院 研究員)

わが国の教育制度は、戦後、民主主義的な新しい教育内容改革の方針として1946年の『米国教育使節団報告書』(Report of United States Education Mission to Japan) によって位置づけられた。

それを受けた1947年に「教育基本法」(2006年全面改正)および「学校教育法」(2007年改正)が制定され、幼稚園は、幼児教育の大切さが認められ学校教育機関として新たに組み込まれ、「保育要領—幼児教育の手びきー」(以下「保育要領」)が刊行された。

1948年に刊行された「保育要領」の編纂には、連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)の民間情報教育局(CIE)教育部顧問ヘレン・ヘファナン(Helen Heffernan)の功績が多大であった。教育法規における絵本に関する記述は、この「保育要領」において初めてしかも多くの箇所で示された。



『米国教育使節団報告書』に絵本を含むと考えられる児童書についての記述は、第5章「公立図書館」の項に、「日本の文献における一つの欠陥は、児童の読み物が比較的少ないことである。最初の新公共図書館で児童用の素晴らしい蒐集が成功したら、児童期の教育に対する究極の効果は、きわめていちじるしいものとなるであろう。」と記されている。

日本の公共図書館に児童書の所蔵が少ないと強い印象を受けた米国教育使節団(USEMJ)は、日本の子どものためにおくる書籍の購入費としてそれぞれ1000円を寄付し、帰国後、アメリカから多数の絵本を含む児童書が「本の贈り物」として寄贈された。

「本の贈り物」は、まず日本橋三越にて1947年2月1~8日に展示され、その後日本のすべての県を巡回し約10日間ずつ展示会があり、幼稚園においても開かれた。

わが国の戦後の児童書の乏しい状況下に、米国教育使節団の善意から多くの絵本等が贈られたことは、その後の絵本の発展に大きく貢献を受けたと考えられる。

1953年に「岩波の子どもの本」シリーズ(全34冊)が刊行開始され、その中の『ちびくろさんぽ』や『ちいさいおうち』他も「本の贈り物」リストのなかに見ることができる。

本発表は、米国教育使節団からの「本の贈り物」のリストから絵本を中心に検証する。

●戦前の『キンダーブック』附録「ツバメノオウチ」研究ーその概要についてー

浜崎由紀(京都光華女子大学 非常勤講師)

久保昌子(京都市立紫野高等学校 養護教諭)

棚橋美代子(京都女子大学・大学院 教授)

本研究では、1927年に発刊された月刊保育絵雑誌『キンダーブック』の附録「ツバメノオウチ」について取り上げる。『キンダーブック』に関する先行研究は多くみられるが、附録「ツバメノオウチ」に関する先行研究は、いまだ数少ない。

「ツバメノオウチ」は、本誌『キンダーブック』を補完するためのものであったが、その内容は、童話、童謡、お話、健康、衛生など、多岐にわたる。また発行時期によって、内容は変化している。これらの内容を分類し、その概要を明かにしたい。

今回研究対象とする「ツバメノオウチ」は、戦前のものとするが、『キンダーブック』創刊号(B4版)から挟み込まれていた「挟み込み」の資料も「ツバメノオウチ」につながる要素を持っていたと仮定し、「ツバメノオウチ」の前身として対象とする(第I期 1927年11月~1928年12月)。第II期は折り込み「ホイクタイムス」の時代 1929年1月~3月、第III期は雑誌『ツバメノオウチ』、第IV期折り込み「ツバメノオウチ」1939年頃~1944年1月である。しかし、戦前・戦中の「ツバメノオウチ」は、資料が散逸しており、確認途中である。

『ツバメノオウチ』の創刊号において、編集顧問であった倉橋惣三は、「ツバメノオウチについて」の中で創刊の理由を次のように述べている。

1. 毎号の編集において『キンダーブック』本誌だけでは描き尽くせないものが多く残ってしまい、それをできるだけ読者に伝える

2. お母様方と幼稚園の先生方が、お子さんのよき相手、よき教育者になって下さるのに、直接必要な、早速お役に立つことを書き揃えて(筆者下線記入)、キンダーブックに付け添える

3. 子ども、親、先生を一つの興味に結びつけて、幼稚園と家庭との密接な連絡を大切とする

「直接必要な」「早速お役に立つこと」とあることから、幼稚園現場ですぐに役に立つ「ノウハウ的」意図があったのではないかと推測できる。この点も本発表で明らかにしたい。

本研究は、2011年度の絵本学会助成金をいただいた一部である。

●戦中・戦後における海外絵本の翻訳方法に関する研究ー光吉夏弥の絵本翻訳を中心についてー

生駒幸子(龍谷大学短期大学部こども教育学科 講師)

今日の日本では、海外絵本は原書どおりの“左開きヨコ組み”という形式で翻訳されている。しかし、〈岩波の子どもの本〉の初期4回配本(1953年12月~1954年12月)での翻訳絵本にみられるように、戦中と戦後しばらくは“右開きタテ組み”という翻訳方法が採られていた。この“右開きタテ組み”への組み直しは、当時の日本語表記は縦書きが通常であったからだと考えられるが、絵本の翻訳には、外国語を日本語に訳すことに加えて、「絵の翻訳」(注1)が必要であった。

本研究では海外絵本の「絵の翻訳」に焦点を絞り、“左開きヨコ組み”である海外絵本の原書を“右開きタテ組み”に翻訳・編集する際に、どのような操作があったのかを検討する。光吉夏弥(みつよし・なつや 1904-1989)は、戦後まもなく出版された〈岩波の子どもの本〉編集において、石井桃子とともに中心的役割を果たした人物である。光吉が戦中に編集した翻訳絵本をはじめとして、“右開きタテ組み”への組み直しが具体的にどのようなものであり、またどのような問題を抱えていたのかを考察する。さらに、光吉以前、また同時代に出版された数冊の翻訳絵本を検討することによって、海外絵本の翻訳がどのような変遷をたどってきたのかを明らかにしたい。

いくつかの海外絵本の原書と翻訳絵本を比較調査した結果、光吉のおこなった“右開きタテ組み”への組み直しには、物語の進行方向を尊重して、絵を逆版にするという方法が採られていることがわかった。この逆版を作品ごとに詳細に検討してみると、子どもの絵本の読みに配慮し、1冊の絵本をひとつの物語とする絵本観に基づいていることがわかる。時代の通過点であった“右開きタテ組み”的翻訳絵本から、「絵本とは何か」という問い合わせ合う当時の絵本翻訳者たちの真摯な姿勢が垣間見られる。

(注1) 三宅興子 「「絵本」の「翻訳」史・試論」「図説 児童文学翻訳大事典 第4巻【翻訳児童文学研究】」大空社 2007年(pp.11-29)

●「赤ちゃん」絵本についてこぐま社の出版から考える

廣田真智子・中川亜沙美・西脇由利子・丸尾美保・万本光恵・渡邊万由美・三宅興子(「こぐま社の絵本」研究会)

近年、0歳児までを対象とする「赤ちゃん絵本」は、赤ちゃん研究の成果や少子化による子ども産業の勢いと、「子ども読書年」

(2000年)・「ブックスタート」(2001年～)を契機にした育児支援のツールとしての絵本認識を背景に、急速な広がりを見せていく。

こうした「赤ちゃん絵本」ブームの中、こぐま社は最初0歳児をも対象にした「赤ちゃん絵本」出版には慎重であった。こぐま社の創立者・佐藤英和は子どもへの創作絵本づくりに強固な意思と新刊出版に際する倫理的とも言える節度をもち、流行に流されないことを心がけてきた。設立初期、1970年に創られた乳幼児絵本の代表ともいべき「こぐまちゃん」シリーズは子どもが会うはじめての絵本という認識のもとに幼児の生活場面を中心に描かれたもので、当時にあっては、主な読者は幼児であった。0歳児の赤ちゃん読者をも獲得した柳原良平の『かおかおどんなかお』(1988)は当初、「赤ちゃん絵本」として作られたものではなかった。赤ちゃん期にはわらべうたなどを歌い、語りかけることがふさわしいと考えてわらべうた絵本等を出版してきた。それは、こぐま社が「その時期の子どもにもっとも大切なこと」はなんであるかという問い合わせを大事にしてきたからであろう。このように、2005年に0歳児までも読者に想定してつくられた三浦太郎の『くついた』の出版に至るまでには試行錯誤と逡巡が見られる。「赤ちゃん絵本」について識者らの見解を求め、編集者や絵本作家らと話しあい、また問い合わせ、読者に向かっては冊子「こぐまのともだち」(1995～)で繰り返し「赤ちゃんと絵本」についてとりあげてきたことが、こぐま社が「赤ちゃん絵本」に真剣にとりくんできたことを物語っている。

実際の赤ちゃんたち(0・1・2歳児)と絵本を仲立ちにした遊びや読み合いをするなかで見えてきた「赤ちゃん絵本」が内包している問題をさぐりながら、こぐま社発行の「赤ちゃん絵本」—『くついた』、『かおかおどんなかお』の2作品を中心にして検証を行いたい。

●矯正教育の現場における絵本の可能性～声が誘い出すもの～

村中李衣(梅光学院大学文学部)

刑務所における矯正教育のプログラムのひとつとして、継続して行っている「絵本の読みあい」が、受刑者にもたらす自己理解・他者理解の過程を追うことで、絵本がもつ新たな可能性について考察する。

わが子に自分の声で録音したCDと絵本を送るという試みが、矯正教育の現場で大きな効果をあげている理由の一つに「自身の声を愛することに用いる」という経験が挙げられる。絵本の中に登場するセリフやナレーションは、絵やストーリーに沿って世界をどう受け入れていくのかが平易な言葉で綴られている。この「言葉」を音声化した時に、意味より先に自分の中のこわばったなにか(嫌悪だったりこわびたりだったり、哀しみだったり)が溶解し、その身体的な変化に気づいたとき、一気に作品と自分を生きるものがありの距離が縮まっていくのではないか。特に絵本の表現を声に出した時の母音の効果が大きいように思われる。このことを、具体的な事例を用いて発表する。

研究発表 C室 大会1日目(八千代座)

座長: 藤本朝巳、石井光恵

大会2日目の研究発表Cは、八千代座を会場に「モーリス・センダックのポター論検証—削除された4枚のイラストレーション」(藤本朝巳・赤羽尚美・永井雅子)、「八島太郎 Crow Boy 論」(岩佐優子)、「かがくいひろしの絵本にみる身体性—『おふとんかけたら』を中心に—」(鈴木穂波)、「『さっちゃんのまほうのて』について」(横山仁雄)、「三橋節子の絵本『雷の落ちない村』をめぐる物語」(仲田公彦)の5件の研究発表が行われた。座長は前半を藤本朝巳、後半を石井光恵が務めた。八千代座という由緒ある芝居小屋の大舞台で、大スクリーンを使っての研究発表に不足はない。しかし2日目の地味な研究発表で、会場が大きすぎてがら空きであつたら、却って発表しづらいのではないか、という心配も幕開けとともに杞憂であったことがわかった。山鹿の聴衆は温かく、2日目といえど研究発表ではどのようなことがなされるのだろうかと、多くの人が好奇心をもって会場を埋めて下さった。研究発表も盛り上がりはないはずがなく、示唆に富んだやり取りがさまざまになされた。フロアからの発言が多く聞かれたことも、会場の活気を象徴していた。

発表の内容としては、大きくは前半3件の緻密に積み重ねた絵本研究と、後半2件の絵本や絵本研究に対する大胆な視点での問題提起に別れたかと思われる。先の3件では、かなり緻密に研究がなされており、「モーリス・センダックのポター論検証」では、削除された4枚のイラストレーションを中心に、当時の出版サイドからの要求とポターの逡巡などが詳細に語られ興味深かった。2番目の「八島太郎 Crow Boy 論」では、岩佐はここ2大会ほど連続して八島太郎の絵本について発表しており、今回で3回目となるものであつが、Crow Boyを The New Sun の流れをくむ作品と位置付けながら、根占を舞台にしたこの作品から八島の精神的奇跡の第一歩が始まったと論証していた。「かがくいひろしの絵本にみる身体性」の発表では、ゆかいなユーモアで片づけられそうなかがくいひろしの絵本を、『おふとんかけたら』を取り上げ、「もの」「みたて」「音」「動き」という要素によって作り出される絵本とし、これが読者の身体感覚を引き出すということを、身体性をキーワードに詳細に分析して見せた。あとの2件の発表。「『さっちゃんの



まほうのて』について』では『さっちゃんのまほうのて』を、幼児教育の現場の人間として読み解くという作業から、さまざまに浮かび上がる疑問について言及がなされた。フロアーから多く聞かれた本発表に共感する声に、障害を捉える感覚の時代的移り変わりをしみじみと感じた。「三橋節子の絵本『雷の落ちない村』をめぐる物語」の発表では、「人を医し見送る医療」分野の近年の動向を踏まえ、作者の三橋節子の生きざまを通して多くが語られたが、生と死の視点から絵本が果たせることの可能性を聴衆それぞれが考えたのではないかと思われる。(文責: 石井)

●モーリス・センダックのポター論検証ー削除された4枚のイラストレーション

藤本朝巳(フェリス女学院大学 教授)

赤羽尚子(フェリス女学院大学 大学院生)

永井雅子(湘南ふれあい学園 講師)

今年はThe Tale of Peter Rabbit (1902) 出版110周年に当たる。この時期に Beatrix Potter(1866-1943) の作品研究をすることは、意味があることと思われる。

私たち研究チームが所属する大学図書館貴重資料室には、Potterのデビュー作に用いられた、私家版 The Tale of Peter Rabbit の、現存する亜鉛版イラストレーション 42枚(複製した単色画)が所蔵されている。この貴重な複製については、Maurice Sendak (1928-) が BEATRIX POTTER' S THE TALE OF PETER RABBIT (Sendak, 1995)として紹介しており、そこには、私家版から普及版として出版される際に削除及び変更されたイラストレーションに関する私見が述べられている。また Sendakはこの序文で、イギリスの代表的女性作家 Jane Austen(1775-1817)を取り上げ、PotterのAustenに対する傾倒と両者の類似性についても触れている。

Humphrey Carpenterは、Potterと Austen の時代との関係性についてすでに指摘 (Carpenter, 1985)しているが、その事実は、吉田新一(1994)など、他の研究者によっても論述されており、Potter研究者にとっては周知のことである。また、彼女の元家庭教師の息子に送った手紙(The Tale of Peter Rabbitの原型)から私家版、そして商業版、さらに版を重ねる過程において、テクストやイラストレーションがいかに変遷されていったかについては、すでに先行研究等で詳細に述べられ(e.g.Judy Taylor, 1987)、その際の改変の経緯なども明らかにされている。

しかしながら、出版100周年を記念する2002年の版からは、Potterが最初に考えていたといわれる商業版初版に近いものとなり、Potterの創作の本質については、あらためて問い合わせ直す必要があると思われる。というのも、商業版として成功させるためには、作者の意図だけではなく、消費者が好み、喜ぶものにすることが重視されるからである。Sendakは、カラー版になった商業版は私家版よりも多くの点で優れていると述べているが、一方で残念な点もあったと指摘している。そこで本発表では、まず、Sendakが指摘する Potterが Austenを敬愛していた事実や二人の類似性について述べる。次に Sendakが言及した4枚の絵を取り上げ、自ら現役で活躍する絵本作家が考える「The Tale of Peter Rabbit

に見られるイラストレーションの本質」について考察したい。

●八島太郎 Crow Boy論

岩佐優子

八島太郎の Crow Boy(1955)は日本では1979年偕成社発行の『からすたろう』として馴染み深いが、本発表はバイキング社の Crow Boyをテキストとして行う。

1939年夫妻で渡米した八島太郎は日米開戦後のアメリカで絵物語 The New Sun(1943)を出版し、戦後、絵本の創作に取り組み始めている。絵本第一作 The Village Tree(1953)から Plenty to Watch(1954)・Crow Boy(1955)の三作では子ども時代の八島の記憶の中の故郷根占が絵本に再現されているが、Crow Boyと前二作とでは明らかな違いが見られる。前二作のカバー表紙では絵本の主人公がページの流れに沿って右向きに描かれているが、その後の八島作品ではカバー表紙に描かれた主人公の顔や体の向きは全て左向きでページの流れに逆らう形を取っている。裕福な医者の子としてのびのびと育った八島の子ども時代の思い出が The Village Treeでは「遊び尽くし」のように、そして Plenty to Watchでは「手仕事尽くし」のように羅列的に描かれている。しかし、Crow Boyでは遠い山奥から小学校に通う貧しい少年“Chibi”の孤独からの解放と成長が物語の形式で描かれている。このように Crow Boy以降の八島作品では物語が絵本の表面に出てくるよう変化している。そしてその主人公たちはいずれも幼いながらどこかに生きづらさを抱えている。この生きづらさ故に表紙の主人公がページの流れとは逆向きに描かれていると考えられよう。また、Crow Boyのタイトルページの図像には The New Sunのタイトルページと共に通ずる拘置所とその窓の図が組み込まれており、Crow Boyは The New Sunの流れをくむ作品であることが窺える。昨年の発表では Umbrella(1958), Momo's Kitten(1961), Youngest One(1962)に八島の精神の軌跡が見られることを論じたが、根占を舞台にした Crow Boyから既にその第一歩が始まっていることを分析によって明らかにする。

●かがくいひろしの絵本にみる身体性

—『おふとんかけたら』を中心の一

鈴木穂波(梅花女子大学非常勤講師)

かがくいひろしは、1995年にデビューし逝去するまでの約4年間に、15冊の絵本を世に送り出した。かがくいの絵本作りの原点には、身近なものを別のものに見立て、音と動きだけで楽しめる人形劇「人形ボードビル」がある。その「もの」「見立て」「音」「動き」という要素によって作り出される絵本には、読者の身体感覚を引き出すものがあり、かがくいの絵本の大きな特徴といえる。

『おふとんかけたら』(ブロンズ新社 2009年)では、さまざまなものが「ふとんをかける」ことによって生まれる変化を音と動きで表現している。この絵本はいわゆる「おやすみなさい」絵本ともいえるが、従来のそれらとは異を成している。ねむりにつくのは、半分は生き物、半分は生命をもたない「もの」で、最も特異なのが表紙にも描かれている「ソフトさん」である。これまで、ソフトクリームの眠る姿が描かれたことがあつただろうか。表紙には他と

別の角度からのショットでも描かれる「ソフトさん」は、この絵本の中で特別な存在感を放つ。ソフトさんは、ふとんをかけると一緒に溶け始める。眠ることは、動物にとって生命維持のために不可欠な行為であり、そこには、理性を離れ、無防備で本能のままの姿がある。この「ソフトさん」の命を削ってまでの眠りには、強い生理的欲望を感じられる。

かがくいは、「身体感覚とか、生理的なこと、例えば食べることとか、生きている人の誰にでも共通する感覚を大事にしていきたい。」（「講談社絵本通信 新人賞インタビュー かがくいひろしさんの場合・後編 <http://shop.kodansha.jp/bc/ehon/interview04.html>）と語っているが、「見立て」によって生まれるユーモアをもつて人間の根源性を描くこと、そしてその誰にでも共通する感覚を読者と共有しあう喜びをもつということが結実した一つの形をこの作品にみることができるといえよう。

●さっちゃんのまほうのてについて

横山仁雄（長谷幼稚園）

書評では、「友達の言葉に傷ついたさっちゃんが立ち直る姿、ありのままを受け入れ、それを乗り越え、生きていって欲しいと願う両親の愛と支え、さっちゃんを取り巻く子供達の心の変化など、読み終わった時に、読者に元気と希望を与えてくれる、素晴らしい本です」「障害を理解できる本」等と書かれている。また、「発行後25年で65万部も読者の手に渡った、この種の絵本では珍しい絵本」とも言われている。私はこの本を読んだときから何か違和感を覚え、その違和感が何なのかを整理してみようと思った。

私は幼稚園で子どもと遊んでいるので、けいこ先生の立場でこの話を考えてみる。

1 「今日のお母さんは誰ですか」と聞く保育者はいるだろうか。まことに子どもが遊びの中で自然に出て、母親役は1人とは限らず、あちこちで家族が構成されるのが一般的である。

2 まりちゃんが「お母さんになれないよ 手のないお母さんなんて変だもん」と言った時、保育者はまりちゃんに何らかの対応をすべきだが何もしていない。ゆきちゃん なおこちゃんが「そうよ」「変だよ」といっていることにも何もしていない。このような場合、保育者のゆきちゃん達への一言は、まりちゃんに対する一言と同じくらい意味を持つ。

3 さっちゃんとまりちゃんが取組み合いのけんかになった時、保育者は何かをするはずなのに、何もしていない。

4 保育者の目の前で喧嘩になり、さっちゃんと幼稚園を飛び出したのに、保育者は追いかけることもしていない。このような保育者はいるはずがない。現実に起これば、他の保育者、主任、園長などに助けを頼み、園児が外に出るのを止めるのが当たり前。このあたりで、私はリアリティのなさで読み進めなくなってくる。

5 さっちゃんがお姉さんになった翌日の訪問時の保育者としての言葉。テキストでは「すみれ組じゃ みんなで七夕様の劇を やるんだけど、さっちゃんにお星様になってくれないかな。そうしたら、先生うれしいんだけどな。」とけいこ先生に言わせている。お星様の役はその他大勢の役、さっちゃんが、おり姫役をしたいと言ったらどう話はどのように転回したのだろう。どんな劇をし、

どの役をするかは子どもが決めたい。端役で登園を促すように見える。

保育者の「なになにしてくれたら嬉しい」という言い方も気になる。保育者が喜ぶために、子どもが何かをするものなのか。

また、幼稚園の保育室に鉛筆、消しゴム、定規が挿絵にある。この意味は何か。その他気になることが多いあるが、この本から、障がいに引き寄せられる読者の気持ちを考えてみる。

●三橋節子の絵本「雷の落ちない村」をめぐる物語

仲田公彦（よろづ健康相談「圓」代表）

人を医し見送る医療の分野では近年、NBM(Narrative-based Medicine 物語に基づいた医療)が尊重される様になっている。病気の背景や病者の人間関係に思いを致し、患者の抱えている問題へ全人的に対応するもので、科学としての医学では把握し切れない人間の営みに迫るものと言えよう。絵本「雷の落ちない村」の作者、三橋節子の病気にまつわる物語を書き出し、人が如何に生死んで行くか、自ら予習すると共に、諸彦諸姉の参考として戴ければ幸いと考える。

主人公は手術時に34歳の女性、日本画家である。右鎖骨の平滑筋肉腫により、抗癌剤の動脈内持続注入に引き続き、右上肢離断術と術中照射(IORT:Intraoperative radiotherapy)を受けた。即ち、悪性腫瘍の為に、絵筆を持つ利き腕を肩甲骨から切り落とす手術を受けた。装飾用義手は希望されず、利き手交換を主にリハビリーションを実施した。機能訓練は自主的な書字から始まり、描画を開始、離断術3月後の退院挨拶状を自筆で書き、半年後には百号の画が入選するまでに至った。つまり、利き手でなかった左手を、これまで以上に巧みに使うことに成功した訳である。約9月後に腫瘍は左肺に転移し、切除不可能な状態であった。呼吸困難を有しながら創作活動を行う中で、絵本「雷の落ちない村」は途中まで完成した。主人公は死の1ヶ月前まで病床で絵筆を執ったが、術後2年を待たず昭和50年2月24日に転移性肺腫瘍にて死亡した。

主人公は抗癌剤による化学療法や上肢離断などの過酷とも言える治療を乗り越え、以前にも増して優れた作品を残し得た。本人の人生観や家族の環境、主治医団の協力などにも学ぶところが多い。「自分の限りある生命を絵によって表現する以外にないことを知った時、甦った」のではないだろうか。絵本をめぐる物語を知ることにより、読解が更に深まれば望外の幸せである。

作品発表

作品発表(八千代座交流館)

座長： 笹本 純・佐藤博一

●「森のコンサート」物語をともなう絵画指導より生まれた小学生制作の絵本

沖中 重明(頌栄短期大学専任講師・しかももこどもアトリエ主宰)

●「声音」

加賀美 裕子(東京展「絵本の部屋」運営委員・糸絵作家)

●「おしゃもじさん」

梶浦 恭子(岐阜大学大学院)

●「ぼく」

林 絵美(学生:京都造形芸術大学)

●「治平」

東山 直美

●「おだやかな絵本」

宮崎 詞美(横浜美術大学准教授)

作品発表は、大会 2日目の朝 9時開始にもかかわらず、多くの来場者を迎えた八千代座交流館多目的ホールで行われた。限られた時間内で、作品の全容とコンセプトを制作者自身の言葉で語ることは容易ではないため、作品の展示は、来場者が事前に内容を把握できる有効な場となる。大会における作品発表では、作品展示の状況が会場によって異なり、毎回の課題となっているが、今回は発表会場を囲む回廊に可動式の掲示板が設置され、ほとんどの作品が前日中に展示された。大会実行委員会には急遽、作品台の長机を調達していただくなどの対応をお願いすることになったが、展示の専用施設ではない空間で、可能な限りの環境を整えていたいたことに感謝したい。

発表者一人あたりの割当時間(今回は質疑応答を含めて一人 13分間)はやや短いと思われたが、他のプログラムと重ならないように配慮されたためであり、結果的に来場者の移動は少なかった。また、発表時間中にマイクトラブルが発生したが、実行委員会スタッフの機転で事なきを得た。

現物投影機の最大原稿サイズを超過している作品もあったため、スクリーンへの拡大投影ではなく、手持ちによる会場への読み聞かせのスタイルで作品が紹介されることもあったが、その際には発表者どうしの協力が見られ、緊張感の中にも和やかな空気が漂っていた。

沖中重明さんの発表では、自ら主宰する造形教室の生徒作品『森のコンサート』を事例に、子どもの想像力によって一枚の絵画表現から広がった物語世界を、解きほぐし、整理して造形化する実践的な指導法が紹介された。

加賀美裕子さんの『声音(こわね)』は、岡部伊都子、ピーター・タラックの著書を参考に、胎内成長と聴覚の変化が表現された作品である。これまでの主な表現素材であった布や糸に加え、着色樹脂製の透明素材(クリアファイル)を重ねた効果が用いられ、生まれ来る胎児を迎える家族とのコミュニケーションが視覚化されている。

梶浦恭子さんは病気による食事制限という体験を踏まえ、白米をしっかりと食べることの大切さを伝える『おしゃもじさん』を制作した。杓文字のキャラクター造形に課題が残るもの、今回の発表作品が「春の巻」とのことでのこと、これからのシリーズ展開が期待される。

芸術大学 2年生である林絵美さんは、デザインや美術の学科の学生ではないが、自主的に絵本を制作し続けている。自己の探求をテーマに、画面の余白が効果的で、造形の感覚に優れた作品『ぼく』を発表した。会場からさまざまな質疑が寄せられたが、回答に窮する場面もあり、制作と発表の経験を重ねることが今後の課題となろう。

発表経験が豊富な東山直美さんの『治平』は、細部の生き生きとした描写が印象的な作品で、卓越した言葉の表現で物語が綴られている。終盤の文字のないページも効果的で、発表時間の全てが作品の読み聞かせに費やされたが、じっくりと聞き入ることのできた作品である。

宮崎詞美さんの「おだやかな絵本」では、「失われた永遠」の対立概念として「穏やかさ」を表現した作品『おさるの日和』の制作方法が紹介された。画面が進むに従って増えていく猿の数は、等比数列の規則性に基づき、その等比数列の構造图形は安定感がある三角形、最後は三匹(三人)で帰っていくストーリー、画面に描かれた赤い円の位置が不動であることなど、随所に仕掛けとアイデアがちりばめられた表現となっている。「永遠」という作品テーマは、「つくり続ける」という制作者の姿勢にも通底していて興味深い。

絵本学会の大会会場を彩る会員の作品展示と発表は、多くの参加者が実験性に満ちた作品表現に触れ、制作者の生の言葉を聞き、議論する機会である。作品発表の充実は大会運営における継続的な課題であるが、発表者自身にも、自らの作品制作を通じて「研究」を実践している意識をいっそう高め、発表要旨の事前提出や発表方法の向上など、より有意義な時間を作り出せる工夫を望みたい。(文責: 佐藤博一)



ラウンドテーブル

ラウンドテーブル 1

絵本の演劇性

話題提供者 飯野和好(絵本作家)

山口マオ(絵本作家)

中川ひろたか(絵本作家)

長野ヒデ子(絵本作家)

コーディネーター 飛岡光枝(絵本編集者)

パネラーの飯野さん、中川さん、長野さんは直前に終わったばかりの八千代座特別公演「山鹿灯籠 夢日記」の衣装のまま壇上へ。この会の後行われる追加公演のためメークも落とさない状態です。山口マオさんは、翌日、琵琶の演奏と絵本の読み聞かせ会が控えていました。

絵本と演劇の共通点のひとつはまず、少ない場面数で物語を紡ぐという制約にあります。厳選された最小限の登場人物、ひとつの場面で一気に起こる様々な出来事、密度の濃いストーリー展開。そこでは出来事があるスピードと密度をもって劇的に展開します。その魅力に、読者も観客も引き込まれていくのではないかでしょうか。

このラウンドテーブルでは「絵本の演劇性」というテーマで、人気、実力とも当代を代表する4名の絵本作家の方々に語っていただく、はずでした。が、当日のお話はそのような堅い内容に止まらず、日々絵本制作と格闘している方々の、制作の喜びと苦労にまで及びました。お話を伺うにつけ、作品に向かう密度の濃い一時一時の積み重ねで生まれてくる絵本、それがまさに「絵本の演劇性」なのではないかと思いました。

以下、4人の先生方の印象的なことばを記させていただきます。

飯野和好

「絵本の展開を考える時、場面場面を映画や芝居のカット割りを意識して考えています。キャラクターを作る時も脚本と同じでどう動かすかということから登場人物を考えます。絵本の一枚一枚の絵は動かないのですが、ページをめくるという動作によってお話をどんどん動き出してくるのだと思います」

山口マオ

「子供たちにとって絵本は生

まれて初めての「人生の疑似体験」です。絵本という小さな宇宙のなかでそれができるということが絵本の魅力ではないかといつも思っています。イラストの依頼をもらった時は、みんなを驚かせたいし、自分も驚きたいと思います。原作がある絵本を描く時も同じです。いたずら心をいつも持っていたい」

中川ひろたか

「絵本の原作を書くことは児童文学ではなく脚本を書いていると 思っています。映画を作っているような意識です。絵がイメージできないものはけっして画家に渡しません。実は歌も物語と同じように起承転結でできています。そういう形が人の心に感動を生むのではないですか。絵本も歌も人と共同作業で出来上がっていく、そこからまたパワーが生まれます」

長野ヒデ子

「歌舞伎でお馴染みの『外郎売』を絵本で描くことになり、その早口の口上のおもしろさに魅了されました。お芝居ではその役に成りきるとよく言いますが、私も絵本を描く時は、主人公になりきっていて、歩き方から好きな食べ物まで似てくるような気がします。鰯の「たいこさん」を描いた時は足が鰯になっていないか確かめながら描いていました」

絵本原作者と絵本作家というふたつの立場から、人の関わりのなかで誕生する絵本の興味深いエピソードがたくさん語られました。完成した絵に対する原作者の厳しい意見にかえってやる気を喚起されよりよい作品に仕上がったこと、原作のとんでもない展開にどう描けばいいか迷ったが、アイディアを絞り出しておもしろい作品になったことなど。これらの点も、多くの人々の関わりでできていく演劇と共通することではないかと思いました。

最後に、長野ヒデ子さんの絵本にもある「外郎売」の口上を、静岡県小田原市で長年口上遊びを続けている「おだ笑ぼっち」の子供たちが、みごとに披露してくださいました。(文責: 飛岡光枝)



ラウンドテーブル 2

絵本と人権

話題提供者

網 美恵 解放出版編集者

内田麟太郎 詩人 絵詞作家

黒田征太郎 画家

長谷川義史 絵本作家

山本 孝 絵本作家

コーディネーター 松本 猛 絵本・美術評論家

ラウンドテーブル2「絵本と人権」は話題提供者の大半が「なぜこのテーマのラウンドテーブルに呼ばれたのかわからない」というところに、このテーマの難しさと奥深さが潜んでいた。

冒頭、コーディネーターの松本から、絵本テーマの新しい傾向について発言があった。

絵本の多様化のなかで社会とのつながりをテーマにした作品が増え、生きるとは何か、人間とは何かを問う絵本が目につくようになっていると指摘。例として、写真家の高橋邦典氏による東日本大震災で被災した人のポートレートとインタビューをまとめた写真絵本、中国の作家による加害者としての日本をはじめて描いた絵本、井上ひさしが、子どもに憲法について語った講演を武田美穂が絵本化した作品、室井滋と長谷川義史の、男のような名前が付けられた少女の内面を描いた絵本「しげちゃん」などを紹介し、話題提供者それぞれが人権や社会との関わりについて作家として、編集者として何を考えてきたかについて発言を求めた。

内田麟太郎

3.11後に東日本大震災を自分の問題として捉えられるのか、と自らに問うた。作家は日常の感情のなかで生きている。作品とは自分の感情の中からこらえきれずに溢れてくるものだ。自分の場合は原発の問題は書かないことにしようと決めた。宮沢賢治の

「雨ニモマケズ」のような献身は自分にはできない。自分にできることは書いてはいけない。

東日本大震災で、津波が起り、原発事故があつて、一番感動したことは、なんでもないこと値打ちだった。そこに豆腐屋さんがあった。そこに床屋さんがあった。その人達は自分が偉いなどとは思ってもいなかった。しかし、そのなんでもない人々の存在が、どんなにすごいことだったか。なんでもないものの値打ちを感じた。何もなくなったところに石が残っていた。それが希望なのだとthoughted。

作品のテーマとは作家のもの。自分はアホを貫く。

網 美恵

解放出版社が子どもの本を作っているというと驚かれる。子どもの本を作るということは、子どもが元気に育つて欲しいという願いが込められている。その願いは自ずと子どもの人権を守りたいという願いにつながっている。

感動するという世界に辿りつけないでいる子どもがたくさんいる。出版社、編集者の仕事は子どもたちが感動できる世界へ入り込むための橋渡しをすることではないだろうか。

口承文学という世界は、活字文化とは違う。文字を知らない人が自分のなかで消化して、自分のものになっているときに物語を語り伝えることができる。

自分は人間の仕事そのものを伝えたい。

自分の生活に密着した感覚が大切であり、肩肘張ると説教臭い本になってしまふ。

長谷川義史

これを伝えたいとかいうテーマを持って描くことはない。自分が描きたいと思ったことを描いた時、後からテーマがあると他の人がいってくれる。だから、「絵本と人権」というラウンドテーブ



<p>ルに自分が呼ばれるのはよくわからない。</p> <p>『しげちゃん』という絵本が〈人権〉の絵本に選ばれるとは思つていなかった。室井滋さんは子どもの時、男の子と間違われる滋という名前が嫌だった。しかし、大きくなってその名前の意味を聞いて大好きになった。</p>
<p>自分は1年生のときに父が亡くなった。義史という名前の画数が悪いと親戚の誰かが言って、「よしお」と呼ばれるようになった。室井さんと同じように嫌な思いをした。</p>
<p>明るく「はーい」と返事をする子どもが良い子だと大人はいう。しかし、子どもの心はもっと複雑、多様であり、単純化して「はーい」という子が良い子と決めつけるのは子どもに対して失礼だと思う。『ようちえん いやや』はそういう思いで描いた。</p>
<p>山本 孝</p>
<p>絵本はかわいいものだと思っていた。高校生の時、長谷川集平の自らのヒ素ミルク体験を絵本にした『はせがわくんきらいや』を見て、絵本はテーマを語れるものだと衝撃を受けた。</p>
<p>子どものころの経験では、絵本の世界に入り込んで疑似体験をすることが楽しく、絵本を読んでいる間だけ、しあわせだった。</p>
<p>黒田征太郎</p>
<p>名前は人の心を揺さぶる。征太郎の征の字は「出征」の字であり、国が戦争に向かって突き進んでいく時代に付けられた名前。最後の国民学校の生徒だった。大人になってからも自分の名前がグラフィックデザイナーにしては古臭く嫌いだった。</p>
<p>人間というものはしょうもないものだ。殺し合いも、差別も終わらないだろう。時代はもっと悪くなるだろう。</p>
<p>戦争は弱いものから殺される。野坂昭如の戦争を描いた本を出そうとしたが、基本的に出版社は売れないものは作らない。マスコミは金儲け主義だ。</p>
<p>東日本大震災の被災地に呼ばれれば行く。自分が絵を描くことが役に立つならどこへでも行く。絵を描くことが好き。絵は人と和ませる力があるのではないか。</p>
<p>フロアからの質問</p>
<p>離婚家庭が増えてきているなかで、両親が出てくる絵本は読まないという傾向があると思うか。こういう本を読むと子どもを傷つけることになるのか。</p>
<p>内田麟太郎</p>
<p>読んでもいいのではないか。無菌状態で育てるようなことは良くない。雑菌に触れてないとまずい。他の話題提供者もほぼ同意見。</p>
<p>コーディネーター 松本 猛</p>
<p>多様な発言があり、議論を深めることも、まとめることも難しい。しかし、それぞれの発言者は、自分の人生をしっかり生きることが大切であり、自分自身を感じることを大切にすることこそが、人権を大切にすることに繋がると語っていたのではないか。読者が絵本を育てるのであり、一人ひとりの読者が自分を信じることが大切だろう。(文責・松本猛)</p>

<p>ラウンドテーブル 3</p>
<p>九州から送る風</p>
<p>話題提供者 横田幸子</p>
<p>高野和佳子</p>
<p>ささめやゆき</p>
<p>あべ弘士</p>
<p>コーディネーター 広松由希子</p>
<p>広松 「九州からの風」というお題に相応しいスピーカーをお招きしています。横田幸子さんは「特定非営利活動法人 熊本子どもの本の研究会」の理事長で、『神話的時間』をはじめとする出版物でご存知の方も多いと思います。高野さんは、やはり熊本のNPO法人「ペペペペらん」の代表で、本屋さんや子どもの支援活動など本当に幅広い活動をされています。画家で絵本作家のささめやゆきさんは10年ぐらい前に山鹿で講演をされて、思いがけず大変うまくいった縁の地であると伺っています(笑)。あべ弘士さんはずっと旭川に根を張った活動をされていて、話が熱くなつたところで「北からの風」も吹いたらしいなと思います。では横田さんからお願いします。</p>
<p>横田 私が40年前に「びわの木文庫」を始めた頃は、公共図書館はもちろん学校図書室も週1回ぐらいしか開けられず、その図書室も全然本がない。長男が本好きで、週1回、県立図書館に駆けつけて借りるという姿を見て、家庭文庫を開いたというのが原点です。また「熊本子どもの本の研究会」を始めたのは、自分が東京に出かけて講演を聞いたりするのはいいけれど、熊本においても、誰もが一流の方の講座や講義を受けられるような環境を作りたいと思ったのがきっかけです。毎週水曜には例会を持ち、絵本、昔話、お話、児童文学の4つのテーマで勉強しております。また公開講座も大きくやっており、10周年には熊本県下20会場、1会場で5回、それだけでも100回、お話の講座を持ちました。企画した時、スタッフのひとりが5回くらいでいいのではと言いましたが、私はそれでは点として消えてしまう、線となって面として広がっていくためには20会場ぐらいやらなければと、なかば強引に押し切りました。そのおかげで、お話の種まきができたと思います。その時、鶴見俊輔先生の記念講演と、谷川俊太郎さんと工藤直子さんの対談、谷川さん、佐野洋子さんと西成彦先生の鼎談もあり、その3つをまとめたのが『神話的時間』です。私共の活動でいいことは、関わっている人たちが、子どもの本を学ぶだけでなく、お互いに切磋琢磨して自分を高めるということです。何もわからなかつた若いお母さんが、ひとりの社会人として成長していく姿を見て、とても幸せに思っております。</p>
<p>高野 「ペペペペらん」は谷川俊太郎さんのお話に出てくる宇宙船の名前をいただきました。21世紀を担う子どもたちと共にお話を世界へ飛び立ちたいという一念のもと、1990年に立ち上げました。もともと友人と文庫活動をしていて、定期的にもっと子どもたちと出会えないだろうかということで仲間と始めました。近年は子育て中のお母さんやボランティアの人たちと、講座や講演な</p>

どを共有する時間もいただいております。今、子育て中のお母さんたちは一所懸命、愛情を持って子育てしているんだけれど、子守唄を知らなかつたり、歌っていても SMAPだったり。そういう方たちと直接向き合いながら、0歳児にどんな子育てをしていくのかを伝えなければいけないし、その中でキャッチボールのようにいろんなことを感じております。また子どもとお母さんの「キッズルーム」も20年くらいやっていて、卒業生には中学生、高校生もいます。そういう子たちが小さい弟妹を連れて来ると、手遊びなど忘れてしまったと言いながら、始めると元気よくやるんです。言葉ではなく心にしみついて残るものなんだなと思います。お母さんたちの支援のために、毎週金曜「ミニ保育園」もやっています。お母さんが用事をすませたりリフレッシュする時間も必要だし、子どもさんにとっても親御さんと離れる時間は大事だと思うんですね。赤の他人の私たちを信頼して預けてくださるのはありがたいと思います。いろんなことをやっていますが、発案したことはやらないとすまない、後のこととはあまり考えないO型集団(笑)。今できることを、ろうそくの灯をともすようにやっていこうと考えております。

ささめや おふたりのお話を聞いて、感服しました。ぼくらは絵本を手に取る人たちとの交流がないので、こういう方の活動があればこそ、ぼくらが絵本を作っていくんだなと。自分がなぜ絵本を作るかというのを、今の段階ではよく言えないんですが。子どもの純真な目の前に立つと、すっかり自分が汚れてしまって、恥ずかしくなるところがあるんです。子どもの頃は、みんな絵が素晴らしいんですよ。小学校に上がると少し純真なものから外れるというか、中学、高校となると普通の、常識的な絵になってしまいます。教育の問題か人間の性なのか、でもひとつは人の目だと思います。よく描こうとか、ほめられたいとか思うと純真な気持ちが失われていくので。りんごをりんごらしく描いてりんごにはならないのに、年齢が上がると既成概念に近づいていく。でも、絵というのはそうじゃないと思うんです。ぼくたちは、誰もが知っている形を描いても絵本にならない。それをどうするかが問題なんですよ。誰にも描けない絵みたいなものを、自分にも描けない絵を望むんです。それは、すべてを超越するなにかがあるんですよ。小さい子の絵というのは、それだと思うんです。人の目とか、ほめられたいというのがないから、自由に描くんだけれど、その自由がどんどんなくなつていって、もう一回、自由にならなきゃいけないのはすごくつらいんですよ。それは絵を描くだけじゃなくて、人間として生きていく時も大切だと思うんですね。そこで、ぼくもいつも葛藤しています。

あべ 「地方からの風」と置

き換えて、特に動物園という立場から地方を考えてみると、旭山動物園は昭和42年にできたんです。その頃、地方に動物園が雨後の筈のようになっていた。私は旭山動物園ができる5年後に飼育係になった。だから非常に若い動物園。地方はみんな若いんですよ。ということは発想が自由なの。毎日のように先輩と酒飲みながら動物園の話して。いのちとはなんぞや、動物園はなんのためにあるのか、そういう議論をしていた。結論なんか出るわけないのに、決めたんです。動物園は、地元の動物に責任を取るのが使命である。だから、北海道の動物だけの動物園を作った。それから旭川の一番の魅力は冬。マイナス30度で8メートルも雪が降るけど、とってもきれいなので、夏閉園して冬開園しようと。今は年中やっていますけどね。一番はアンチ上野。絶対、中央のまねはしない。ということで頑張ってやったんですけど、その時の市長が動物園大嫌いで、16年間予算ゼロだったの。その頃園長が、将来君たちの動物園ができるはずだから、理想の動物園像のレポートをまとめろと。毎晩10時ぐらいまでかかって、20考えて、おれが絵を描いた。予算ゼロということは、頭の中では無限大に遊んでいい。そのレポートを、市長が代わった時に園長が持っていたら、1億の予算がついた。園長が、あべ、絵の力はすごいな。素人がわかる、と言っていました。絵は未来を描ける。過去も描ける。予算がついたのと、それから、技術がおれたちの発想に追いついた。アクリルチューブに人を通して昔は夢物語だった。だから、あんまり急いでやっちゃいけないんですね(笑)。

広松 地域で互いに育ち合う活動のこと。点ではなく線につながり、面として広がっていくこと。そしてまねではない、地域ならではの自由な発想についてなど、立場の違う4人の方から、今日はいろんなヒントをいただきました。作り手、読む子ども、届ける人、伝える人、絵本に関わる人は、みんなが主役だと思うんですね。自分が主役！と思って話を吸い込んで持ち帰って、また新しい視点でそれぞれの場所に広げていただければと思います。

(文責: 広松由希子)



絵本学会第15回定期総会

日時：2012年6月2日(土) 18:00~18:30

会場：八千代座 交流館（熊本県 山鹿市）

議長：藤本朝巳 書記：今田由香

出席者数：42名、委任状提出者数 77名

1. 開会の辞

香曾我部秀幸事務局長より開会の辞が述べられた。

2. 議長・書記選出

議長に藤本朝巳氏、書記に今田由香氏が選出された。

3. 会長挨拶

中川素子会長より、第15回定期総会開催にあたり、挨拶が述べられた。

4. 役員の交替について

香曾我部秀幸事務局長より、役員選挙の結果が報告され、拍手をもって承認された。また、藤本朝巳議長より、新・旧役員の紹介が行われた。

5. 新会長挨拶

新たに会長に就任した松本猛氏より、挨拶が述べられた。

6. 2011年度活動報告

石井光恵紀要編集委員長、今井良朗広報委員長、大橋眞由美研究委員(永田桂子研究委員長代理)、杉浦篤子企画委員長、藤本朝巳機関誌編集委員長、香曾我部秀幸事務局長、第14回絵本学会大会委員長シャウマン ヴエルナー氏より、資料に基づき、下記のような2011年度活動報告がなされ、承認された。

◆絵本学会 2011年度活動報告

◎第14回絵本学会大会の開催

2011年6月11日(土)、12日(日) 大正大学(東京都豊島区)

テーマ：「絵解き・絵巻・曼荼羅と絵本」 参加者 会員 114名、一般 133名、学生 44名

◎企画委員会の活動

・絵本フォーラムの開催 2011年4月23日(土) 日本児童教育専門学校(東京都新宿区)

テーマ：「手作り絵本のススメ」 参加者 30名

◎紀要委員会の活動

・絵本学会研究紀要『絵本学』第14号の刊行

・2011年度絵本参考文献目録(2010年9月～2011年12月)の作成

◎機関誌編集委員会の活動

・機関誌『絵本BOOK END 2011』の刊行

◎研究委員会の活動

・研究会の開催 2011年7月10日(日) 大阪府立中央図書館大会議室

公開インタビュー：「せとうちたいこさんの絵本作家・長野ヒデ子さんに聞く」 参加者 40名

・絵本研究助成(2件、各3万円)

「戦前における「ツバメノオウチ研究」」(代表者 棚橋美代子)
「Beatrix PotterのThe Tale of Peter Rabbit 初版本のドローリング研究」(代表 藤本朝巳)

◎広報委員会の活動

・『絵本学会NEWS』の発行 42号(5月)、43号(11月)、44号(2月)

・HPの管理運営

◎他学会等との連携

子どもの本WAVE、JBBY、日本児童文学学会、日本イギリス児童文学会、日本マンガ学会、

紙芝居推進協議会、紙芝居文化の会 等との連携推進

◎入退会

新入会者 36名 退会者 27名(除籍者を含む)

7. 2011年度決算・会計監査報告

香曾我部秀幸事務局長より、資料「2011年度収支決算案」にもとづき、会計報告がなされた。第14回絵本学会大会の収入を80,914円と計上したが、これは全額、財団法人大阪国際児童文学館、大阪府書店商業組合、毎日新聞社が主催する東日本大震災で被災した子どもたちに本をおくるプロジェクト、「いっしょだよ」に募金しており、雑支出として会計処理した事、これらが今年度のみの例外的な会計処理であることが報告された。以上について、監査担当の竹迫祐子氏より、監査の結果適正と認める旨、報告された。審議の結果、2011年度決算報告が承認された。

8. 2012年度活動計画について

松本猛新会長より、資料に基づき 2012年度活動計画について説明がなされ、承認された。また、今年度学会事務局が日本女子大学に移転予定であり、会員には改めて移転の案内葉書を送付する旨、伝えられた。

◆絵本学会 2012年度活動計画

◎第15回絵本学会大会の開催

2012年6月2日(土)、3日(日) 八千代座(熊本県山鹿市)

テーマ：「絵本からはじまる 絵本からつながる」

◎企画委員会の活動

・絵本フォーラムの開催

◎紀要編集委員会の活動

・絵本学会研究紀要『絵本学』第15号の刊行

・2012年度絵本参考文献目録(2012年1月～2012年12月)の作成

◎機関誌編集委員会の活動

・機関誌『絵本BOOK END 2012』の発行準備

◎研究委員会の活動

- ・研究会の開催
- ・研究講座の開催
- ・絵本研究助成(2件、各 3万円 2012年6月25日締め切り)
- ◎広報委員会の活動
- ・『絵本学会NEWS』の発行(年3回の予定)
- ・HPの管理運営
- ◎他学会等との連携
- 子どもの本WAVE、JBBY、日本児童文学学会、日本イギリス児童文学会、日本マンガ学会、紙芝居推進協議会、紙芝居文化の会、等との連携推進
- その他
- 絵本学会賞の設立を検討中である。また学会設立20周年に向けて、記念事業を企画していく予定である。

9. 2012年度予算案について

松本猛新会長より、資料「2012年度決算案」にもとづき、説明がなされた。審議の結果、原案通り承認された。

10. 質疑応答

会員より絵本学会の日本学術会議協力学会研究団体への登録について質問があり、登録の是非については今後理事会で検討していくことになった。

11.閉会の辞

石井光恵新事務局長より閉会の辞が述べられた。

絵本学会 2011年度収支 決算書

2011年4月1日～2012年3月31日

科目	予算額	決算	増減	備考
I 事業活動収支の部				
1.事業活動収入				
①受取会費収入	3,540,000	3,713,000	-173,000	
賛助会員	300,000	240,000	60,000	20,000×12口(現在13団体)
正会員	3,200,000	3,463,000	-263,000	8,000×432名(のべ人数)+7千円
準会員	40,000	10,000	30,000	2,000×3名+昨年度預り金4千円
②事業収入	215,000	163,614	51,386	
研究活動事業収入	65,000	56,000	9,000	
フォーラム収入	35,000	30,000	5,000	入場者収入
研究講座収入	30,000	26,000	4,000	
大会収入	0	80,914		
出版事業収入	150,000	26,700	123,300	『絵本BOOK END 2010』他
③雑収入	130,200	102,890	27,310	
受取利息収入	200	160	40	
入会金収入	80,000	80,000	0	入会金 2000×40名
雑収入	50,000	22,730	27,270	出版物在庫販売など
事業活動収入合計	3,885,200	3,979,504	-94,304	
2.事業活動支出				
①事業費支出	1,895,000	1,733,540	161,460	
人件費支出	300,000	300,000	0	
事務局報酬支出	300,000	300,000	0	事務局報酬等
事業費支出	1,595,000	1,433,540	161,460	
消耗品費支出	30,000	15,080	14,920	
印刷製本費支出	730,000	616,715	113,285	
絵本学会ニュース	250,000	226,275	23,725	42、43、44号
研究紀要	430,000	389,340	40,660	『絵本学』14号
会員名簿	20,000	0	20,000	
その他	30,000	1,100	28,900	払込書印字サービス代
通信運搬費支出	250,000	217,111	32,889	ニュース等発送費・通信費
旅費交通費支出	500,000	444,000	56,000	理事旅費等
会議費支出	10,000	6,780	3,220	
広告費支出	50,000	30,000	20,000	
印刷物制作費支出	20,000	0	20,000	
HP更新作業費支出	30,000	30,000	0	
振込手数料	15,000	7,940	7,060	
雑支出	10,000	95,914	-85,914	寄附金及び発行物発送に伴う人件費他
②活動費支出	785,000	695,243	89,757	
大会運営補助金支出	300,000	300,000	0	ポスター等制作費を含む
専門委員会活動費支出	425,000	335,948	89,052	
企画委員会	150,000	139,995	10,005	フォーラム等
紀要委員会	55,000	15,316	39,684	紀要編集等
機関誌委員会	60,000	62,480	-2,480	『絵本BOOK END』編集
研究委員会	100,000	93,157	6,843	研究会主催

広報委員会	60,000	25,000	35,000	『絵本学会ニュース』編集
研究助成費支出	60,000	59,295	705	3万円×2
③出版事業支出	1,200,000	1,220,000	-20,000	『絵本 BOOK END 2011』
編集作業費支出	200,000	0	200,000	
制作費支出	1,000,000	1,220,000	-220,000	
事業活動支出合計	3,880,000	3,648,783	231,217	
事業活動収支差額	5,200	330,721	-325,521	
<hr/>				
II 投資活動収支の部				
1.投資活動収入				
投資活動収入計	0	0	0	
2.投資活動支出				
投資活動支出計	0	0	0	
投資活動収支差額	0	0	0	
<hr/>				
III 財務活動の部				
1.財務活動収入				
長期借入金収入	0	0	0	
財務活動収入計	0	0	0	
2.財務活動支出				
長期借入金返済支出	0	0	0	
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出	200,000	0	200,000	
当期収支差額	-194,800	330,721	-525,521	
前期繰越収支差額	4,170,766	4,170,766	0	
次期繰越収支差額	3,975,966	4,501,487	-525,521	

絵本学会 2012年度収支予算案

科目	予算額	前年予算額	増減(予一決)	備考
2012年4月1日～2013年3月31日				
I 事業活動収支の部				
1.事業活動収入				
①受取会費収入	3,700,000	3,540,000	160,000	
賛助会員	300,000	300,000	0	20,000×15口(現在13団体)
正会員	3,360,000	3,200,000	160,000	8,000×420名(現在約450名)
準会員	40,000	40,000	0	2,000×20名
②事業収入	210,000	215,000	-5,000	
研究活動事業収入	60,000	65,000	-5,000	
フォーラム収入	30,000	35,000	-5,000	入場者収入
研究講座収入	30,000	30,000	0	参加費収入
出版事業収入	150,000	150,000	0	『絵本 BOOK END 2011』
③雑収入	130,200	130,200	0	
受取利息収入	200	200	0	
入会金収入	80,000	80,000	0	入会金2,000×40名
雑収入	50,000	50,000	0	出版物在庫販売など
事業活動収入合計	4,040,200	3,885,200	155,000	
<hr/>				
2.事業活動支出				
①事業費支出	1,985,000	1,895,000	90,000	
人件費支出	300,000	300,000	0	
事務局報酬支出	300,000	300,000	0	事務局報酬等
事業費支出	1,685,000	1,595,000	90,000	
消耗品費支出	100,000	30,000	70,000	事務消耗品費
印刷製本費支出	760,000	730,000	30,000	
絵本学会ニュース	250,000	250,000	0	45,46,47号
研究紀要	430,000	430,000	0	『絵本学』15号
会員名簿	20,000	20,000	0	新入会追加分

その他	60,000	30,000	30,000	封筒等
通信運搬費支出	250,000	250,000	0	ニュース等発送費・通信費
旅費交通費支出	400,000	500,000	-100,000	理事会旅費等(理事会4回/年)
会議費支出	10,000	10,000	0	
広告費支出	100,000	50,000	50,000	
印刷物制作費支出	20,000	20,000	0	
HP更新作業費支出	80,000	30,000	50,000	
振込手数料	15,000	15,000	0	
雜支出	50,000	10,000	40,000	事務局移転に伴う経費分含む
②活動費支出	820,000	785,000	35,000	
大会運営補助金支出	300,000	300,000	0	ポスター等制作費を含む
専門委員会活動費支出	460,000	425,000	35,000	
企画委員会	150,000	150,000	0	フォーラム等
紀要編集委員会	50,000	55,000	-5,000	紀要編集等
機関誌編集委員会	60,000	60,000	0	『絵本BOOK END』編集
研究委員会	100,000	100,000	0	研究会主催
広報委員会	100,000	60,000	40,000	『絵本学会ニュース』編集
研究助成費支出	60,000	60,000	0	3万円×2団体
20周年事業支出	0	0	0	
③出版事業支出	1,200,000	1,200,000	0	『絵本BOOK END 2012』
編集作業費支出	0	200,000	-200,000	
制作費支出	1,200,000	1,000,000	200,000	
事業活動支出合計	4,005,000	3,880,000	125,000	
事業活動収支差額	35,200	5,200	30,000	

II 投資活動収支の部

1.投資活動収入

10周年事業資産金取崩収入	0	0
投資活動収入計	0	0

2.投資活動支出

投資活動支出計	0	0
投資活動収支差額	0	0

■財産目録

2011年3月31日現在

科目	金額
I 資産の部	
1.流動資産	
現金預金	
現金手元有高	68,025
普通預金 りそな銀行高槻支店	1,064,320
定期貯金 高槻天王郵便局	2,000,000
絵本学会振替口座	1,069,142
次年度仮払い金(大会運営補助金)	300,000
流動資産合計	4,501,487
資産合計	4,501,487
II 負債の部	
1.流動負債	
流動負債合計	0
負債合計	0
正味財産	4,501,487
次年度繰越金	
計	4,501,487

研究委員会からのお知らせ

● 2012年度研究助成について

先にニュースでお知らせした本年度研究助成の募集に対し、3件の応募がありました。研究委員会及び理事会で厳正に審査した結果、下記の2件に助成することが決定しました。助成額は1件3万円です。

- ・戦後絵本史における「こぐま社」絵本研究(研究代表者:廣田真智子)
- ・イラストレーションと翻訳文体—ヨーロッパ伝承文学の絵本化及び絵本と翻訳の研究(研究代表者:藤本朝巳)

● 絵本研究会のお知らせ

絵本におけるブックデザイン

絵本学会研究委員会の企画により、標記の様なテーマで絵本研究会を開催します。ゲストとして、海外での出版経験が豊かでデザインに配慮した絵本を多く出されている絵本作家いまいあやのさんと、ブックデザインの専門家で絵本にも造詣が深い佐藤博一さんを迎える、絵本とブックデザインとの関わりについて考えます。皆さまのご参加をお待ちします。

◎名称: 絵本研究会「絵本におけるブックデザイン」

◎日時: 2012年11月17日(土) 13:30~16:00

◎場所: 武蔵野美術大学美術館ホール(東京都小平市小川町1-736)

◎ゲストスピーカー:

いまいあやの氏: 絵本作家。主な作品として『チャッピィの家』『くつやのねこ』『イソップ物語—13のおはなし』など。『くつやのねこ』は「この絵本が好き!」国内絵本ベスト1、ブラティスラヴァ世界絵本原画展「子ども審査員賞」を受賞。

佐藤博一氏: 京都造形芸術大学教授。出版・編集に係るグラフィックデザインおよび写真を専門とする。

◎参加費: 無料(会員、一般とも)

◎定員: なし(会場の収容定員200名を超える場合は入場制限あり)

◎事前申込み: 不要

◎問合せ先: 絵本学会事務局(ehon-g@xqe.biglobe.ne.jp)

*武蔵野美術大学美術館では展覧会「近現代のブックデザイン考—書物にとっての美」を開催中(10月22日~11月17日)です。あわせてご覧下さい。

企画委員会からのお知らせ

● 2012年度 絵本フォーラム開催予告

企画委員会では、絵本作家とともに絵本を楽しみ、絵本について考えるフォーラムの連続開催を予定しています。現在、日本を代表する絵本作家に出演交渉中です。詳細が決定しましたら、絵本学会のホームページにてお知らせします。

事務局からのお知らせ

2012年度絵本学会合同理事会 議事録

日時: 2012年6月2日(土) 10:00~12:00

会場: 八千代座 交流館 会議室

出席者(現理事): 中川素子(会長)、香曾我部秀幸(事務局長)、石井光恵、今井良朗、今田由香、大橋眞由美、杉浦篤子、長野ヒデ子、藤本朝巳

出席者(次期理事): 松本猛(次期会長)、石井光恵(次期事務局長)、今井良朗、今田由香、香曾我部秀幸、佐藤博一、笹本純、藤本朝巳、本庄美千代

欠席者: 永田桂子(現理事)、武田美穂(次期理事)

議長: 中川会長

○会長挨拶(中川素子)

○報告事項

1. 前回議事録の確認

2. 第15回絵本学会大会について

・大会実行委員会より、会員の参加90名、一般の参加のうち、両日参加290名、6月2日のみ参加512名。

3日のみ参加57名の事前申し込みがあったとの現況報告があった。

・地元のボランティアスタッフは100名に上ることが報告された。

・大会のタイムテーブル、研究発表・作品発表の座長担当者について確認された。

3. 各委員会報告

それぞれの現委員会委員長から今期の活動報告を行い、次期委員長へ引き継ぎがなされた。

1) 企画委員会

2) 紀要編集委員会

3) 機関誌編集委員会

・「BOOKEND」の特集を組むことは継続して行い、次号の特集にはピーターラビット110周年に関する記事を掲載する予定。

4) 研究委員会

・研究助成に関して、毎年の予算は総会で承認されるため、大会までに発行されるNEWSに広報するには早すぎるが、今回は次期理事会へ向けての引き継ぎもあったため事前に告知した旨、報告された。

・研究助成に関して、規定を明文化する(助成期間、助成の件数、金額、決定方法等)ことが提案された。

とくに助成件数は、当初の3件を現在2件に減らしているが、申込が多い場合は、3件に戻しても良いのではないかという意見が出た。

助成を受けた団体へ証明を出す必要がある場合、その書式規格を作成する必要があることも同意された。

<p>5) 広報委員会</p> <ul style="list-style-type: none"> 今後、ホームページの充実を検討する。 <p>4. 指名新理事の紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> 指名新理事として、佐藤博一氏、武田美穂氏、本庄美千代の3氏が承諾されたことが報告された。 <p>5. 各委員会(新) 新委員の選任報告</p> <table border="0"> <tr> <td>1) 企画委員会長</td> <td>今田由香</td> </tr> <tr> <td>2) 紀要編集委員会長</td> <td>香曾我部秀幸</td> </tr> <tr> <td>3) 機関誌編集委員会長</td> <td>藤本朝巳</td> </tr> <tr> <td>4) 研究委員会長</td> <td>笹本純</td> </tr> <tr> <td>5) 広報委員会長</td> <td>今井良朗</td> </tr> </table> <p>各委員会の委員については、現在検討中、次回理事会にて各委員長より報告する。</p> <p>○審議事項</p> <p>1. 第15回絵本学会大会総会議案について</p> <ul style="list-style-type: none"> 2011年度活動報告、2011年度決算、2012年度活動計画、2012年度予算について、最終的な確認を行い、昨年度活動報告については、それぞれの委員長が行い、今年度の活動計画については、次期会長より報告することが決定された。 <p>2. 会員の入退会の承認(敬称略)</p> <ul style="list-style-type: none"> 入会者: 中川淳、国広勝代、藤本夏美、石川正一、道又紫穂、米山博子、富田克己 退会者(会費三年未納除籍者): 池田智子、石川晴子、大木理恵子、嚴惠淑、小崎真、駒木根剛、小松原優、佐藤直人、鈴木潤子、竹内亨、朴瓊淑、原島恵、松尾春香、藪中征代、長谷川みち子、蓮岡修 <p>3. 20周年記念事業について</p> <ul style="list-style-type: none"> 学会設立20周年に向けて、記念事業を検討していくことが了承された。 <p>4. 「学会賞」の設置について</p> <ul style="list-style-type: none"> 懸案事項の「学会賞」の設置について、次期理事会で引き続き検討していくことが決定された。 <p>5. 次回大会 開催場所・日程について</p> <ul style="list-style-type: none"> 現時点において次回大会開催場所は未定。関連機関に問い合わせながら、近日中に決定する方向で検討する。 <p>6. 事務局移転に伴う保管資料の処分について</p> <ul style="list-style-type: none"> 現事務局で保管している学会の発行物「BOOKEND」、「絵本学」、「NEWS」のバックナンバーについて、今後はアーカイブとして武蔵野美術大学図書館で各20部保管し、梅花女子大学で各20部保管、新事務局の日本女子大学で販売用に各30部を保有することが決定した。残部は、広報宣伝に利用するため、各理事に均等に配布することになった。 <p>7. その他</p> <ul style="list-style-type: none"> 「BOOKEND」及び「絵本学」は、これまで通り過去3年分は1000円で販売し、それ以外のバックナンバーは300円で販売する。大会開催のときには、過去3年に刊行した「BOOKEND」と「絵本学」を販売することが確認された。 	1) 企画委員会長	今田由香	2) 紀要編集委員会長	香曾我部秀幸	3) 機関誌編集委員会長	藤本朝巳	4) 研究委員会長	笹本純	5) 広報委員会長	今井良朗	<p>・「BOOKEND」及び「絵本学」は、これまで通り過去3年分は1000円で販売し、それ以外のバックナンバーは300円で販売する。大会開催のときには、過去3年に刊行した「BOOKEND」と「絵本学」を販売することが確認された。</p> <p>7. その他</p> <ul style="list-style-type: none"> 事務局の移転に伴い、新事務局の連絡先は、現事務局より会員へハガキで周知することが確認された。 松本猛新会長より挨拶があった。 理事会終了後、現理事会より新理事会への報告・引継等が行われた。 事務局の引き継ぎは、6月23日(土)、日本女子大学にて行う。 <p>次回の理事会は、6月24日(日)14時から17時まで日本女子大学にて開催する。</p> <p>第3回 絵本学会理事会 議事録</p> <p>日時: 2012年6月24日(日) 14:00 - 17:30 会場: 日本女子大学 新泉館4階 児童学科会議室 出席者: 松本猛、石井光恵、今井良朗、今田由香、香曾我部秀幸、佐藤博一、武田美穂 藤本朝巳、本庄美千代、長野ヒデ子(第15回大会報告のみ出席)</p> <p>○報告事項</p> <p>1. 会長</p> <p>会長より、新理事会の今後に向けて挨拶があった。</p> <p>2. 前回2012年度絵本学会合同理事会議事録の確認</p> <p>前回合同理事会の議事録と、第3回理事会の議事次第が確認された。</p> <p>3. 第15回絵本学会大会について(実行委員長長野ヒデ子氏より)</p> <p>第15回絵本学会大会について、実行委員長を務めた長野ヒデ子氏より下記のような報告があった。</p> <ol style="list-style-type: none"> 参加者: 約900名、内学生150名 会計報告について 詳細な会計報告は、次回理事会にて行う。 会場について 八千代座で大会を行いたいという気持ちが強くあったが、地理的に遠いということや、発表会場などの点で、諸々の条件が合わないこともあり大変であった。 予算について 学会から30万円、山鹿市から会場費(八千代座をはじめ諸会場の費用)にあたる補助金を、地元の「風吹きからす」の活動に対して貰った。 芝居の幕間に、相撲の懸賞式の広告を考え募ったところ、出版社や個人から多くの協力者が集まった。 <p>5) 大会内容について</p>
1) 企画委員会長	今田由香										
2) 紀要編集委員会長	香曾我部秀幸										
3) 機関誌編集委員会長	藤本朝巳										
4) 研究委員会長	笹本純										
5) 広報委員会長	今井良朗										

・アンケートでは、図書館員や一般の人から、「楽しかった」「これからも参加したい」等の回答が多く寄せられた。会員からは、少數的回答があったが、厳しい意見もあった。

6) 宿泊施設について

・アンケートに、宿泊施設に不満というものがあり、これは山鹿市の観光協会の参考になった。

7) 実行委員長長野ヒテ子氏の大会を終わっての感想が、下記のように述べられた。

・研究は、人と人とのつながり、コミュニケーションを原点としている、それを考えさせられる大会であった。

・てくてく座の公演について、出演者たちからは、「いろいろな人から声をかけてもらったことや、つながりが持てたことがうれしかった」との感想があった。芝居中に投げられたおひねりは、災害復興のカンパに送ることにした。

・シンポジウム「絵本の大衆性」は、とてもいいシンポジウムになったと思う。研究者だけでなく、いろいろな分野で関わることは良いことではなかったかと思われる。

・八千代座で公演した「山鹿灯籠 夢日記」(てくてく座 寸劇仕立て 浪曲入り)が目にとまり、9月 29日(土)に新宿紀伊国屋ザンホールでの上演が決定した。

・てくてく座メンバーと理事会の交流がもっと必要だったのではないか。研究者と作家たちでは、立場も違い、大会への温度差もあり、理事会との顔合わせや、挨拶をする機会などを作る必要があった。

4. 理事の自己紹介(着席順) と事務局からの報告

・会長からの提案で、理事が各自自己紹介をした。

・事務局より、昨日(23日)に前事務局よりの引き継ぎが行われたことが報告された。

5. 各委員会報告

1) 企画委員会

企画委員長より、企画委員として武田美穂理事、ちひろ美術館の原島恵氏をお願いした旨、報告があった。企画委員会では、絵本作家も巻き込んでの企画など、原点に戻して考えたい。みんなの意見を聞きながら、次回の理事会へどのような方向でするか出したいと委員長の抱負が述べられた。

2) 紀要編集委員会

「絵本学」第15号に向けての編集作業を行う。紀要委員として、慣例に従って松本猛会長と、もう一方は武蔵野大学の宮川健郎氏に交渉する予定であることが報告された。

3) 機関誌編集委員会

機関誌編集委員に、生田美秋氏、永野雅子氏にお願いし、三人で頑張りたいと報告があった。

「機関誌 BOOKENDについては、負担という声もあるが」という会長の質問に、「赤羽末吉特集」の号から一般にも売れるようになってきているし、今回の大会でもよく卖れたので、人員や予算を増やすことも考えられるのではないか、との意見も一部理事から出た。

4) 研究委員会

笹本純委員長が欠席のため、代って本庄美千代理事から下記の報

告があった。

研究委員会の委員は、本庄美千代理事にもう1名加える予定で、今後交渉し、委員長より理事会へ連絡することになっている。

5) 広報委員会

広報委員会は、年3回の学会NEWSの発行と、ホームページの管理が主な業務、委員を佐藤博一理事、正木賢一氏にお願いする。広報の課題はたくさんあり、特にホームページの管理やニュースのあり方は、今後の重要な検討課題である。今後、会員の情報発信の場としても検討もしていきたいとの、会長からの発言があった。

○審議事項

1. 『BOOKEND 2012』の目次案について

はじめに、BOOKENDの目次案(別紙)から検討がなされた。

・特集は、ピーター・ラビット出版110周年記念号とすることが承認された。特集の巻頭は、吉田新一氏にお願いする。特集について、さまざまなアイデアが理事からでた。

・新刊紹介は継続審議とすることになり、今号では2011年9月～2012年8月31日までの発行のもので、各理事が9月までに機関誌編集委員長へ推薦することになった。

・大会記録は、今年度は総会・研究発表・ラウンドテーブルなどは従来通り NEWSに掲載することになった。

2. 次回大会開催地について

6月2日の理事会で候補として挙げられた候補地より、次回大会開催について検討する意思のあることを佐藤博一理事が受けていることから、佐藤理事が説明に行くことになった。結果については、メールで理事へ連絡することになった。

3. 絵本学会の課題整理について

現在絵本学会が抱えている課題を出してほしいという会長の要請によって、下記のような課題が各理事から出された。

・研究者にはメリットがあるが、一般の人のメリットが減っている。そういう人たちへのアプローチが必要。

・フォーラムへの会員の参加を増やす努力が必要。フォーラムは交流の中心であり、魅力的なフォーラム作りをしていく必要がある。

・誰もがアクセスできるホームページを充実させ、広報の柱とする必要がある。

・前理事会で、20周年には絵本学会賞を設置することになっており、新理事会で今後検討していく必要がある。

・絵本学会は現在任意団体なので、大学によっては学会刊行物への掲載も業績として認められない場合があり、以前にも話題になっていたことがあるが、日本学術会議への登録も再度検討していく必要がある。

・委員会分離制度になったことで、学会がうまく機能しなくなつたのではないか。組織のあり方を再検討する必要がある。絵本学会ができた原点に戻るべきではないか。

4. 次回理事会開催について

次回の理事会は9月23日(日) 14:00～、日本女子大学児童学科会議室で開催する。

5. 入退会者の承認

以下の新入会者が承認された。

椿奏重、西田麻希子、瀬戸口信悟、武田美穂

●寄贈図書のお知らせ

2012年7月に、以下の図書が絵本学会に寄贈されましたのでお知らせします。

★上岡秀拓会員より

『こころを折らないでー父と娘の会話』(小住和徳文・上岡秀拓絵
夢企画 2012)

●2012年7月・8月の事業後援について

下記2件の事業後援を行うことになった。

★安曇野ちひろ美術館・ちひろ美術館・東京「日中国交正常化40周年記念 中国の絵本画家展」(2012年9月21日~11月30日、
2013年3月1日~5月9日)

★静岡文化芸術大学「ユニバーサルデザイン絵本コンクール
2012」(2012年11月1日~2013年3月10日)

●新事務局からのご挨拶

2012年6月より、絵本学会事務局が移転し、3ヶ月が過ぎました。移行期はてんやわんやで、さまざまにご迷惑をおかけしました。事務局は基本的に週1回、毎週月曜日に開室し、学会関係事務を行っております。これから3年間、ご指導ご鞭撻またご協力の程、よろしくお願ひいたします。

お知らせ

大人のための童話『こころを折らないでー父と娘の会話ー』出版について

「人生って何?」「幸せって何?」「いのちって何?」

そんな子ども達の素朴な問いに、あなたはどう答えますか?—

この絵本は、北九州の小倉にある形成外科・美容外科医院「OZUMIクリニック」院長の小住和徳氏とのご縁で出来上がった作品で、今年6月に刊行されました。本書は、父親とその娘の会話でストーリーが進みます。文章は小住さんによるもので、私は文に添える絵と本のデザインを担当しました。

小住さんは過去に「新生児・未熟児センター」を備えた病院で多くの子供達を治療してきた経験をお持ちですが、そこでは、様々な程度の先天性の外表奇形・脳や心臓の病気などを持つ赤ちゃんが毎日のように運ばれてきます。この本は、小住さんのそうした命の現場で感じ、今も抱き続ける使命や世に伝えたいメッセージを、童話という親しみやすい形で皆様に感じて欲しいという願いが込められた一冊です。

特に本編冒頭の「人生のゴール」のシーンは絵本として衝撃的です。人生のゴールテープを切ろうとしているのは未だ幼い子供。心臓疾患の子供で、青白く痩せているけれども、目が大きくて可愛い顔をしています。「病気と闘い頑張っているけれど、もうすぐ来る自分の死を悟っているような、そんな表情にして欲しい。このシーンをなんとか表現して欲しい。」小住さんのその言葉には、これまで命の現場で背負ってこられたもの、そして子供達に対する感情が全て込められているように感じました。私自身、阪神淡路大震災で大けがを負いながらも家族や周りの人達に助けられた経験があり、それを思い出し「この童話を誰かに報いることができるような作品にしたい」という気持ちがありました。

私たちは、日頃つい「あれが足りない」など引き算ばかりして不幸になっていないでしょうか。生きたくても生きられない子供達にとって引き算はなく、小さな幸せを見つけて積み重ね、足し算するほかないのです。本編にも出てくる言葉「生きる事が勲章なん

だ」という意味は、そこにあります。

本書は「いのち」という大きなテーマを内在しつつも、娘の素朴な問い合わせに対して父親が優しく語りかけるという口語表現で最後まで構成されていますので、とても分かり易く、最後のページまで自然と読み進むことが出来ます。この“いのちの童話”が、誰かの心の痛みや悲しみが和らぐ手助けになればと作者共々願っています。

上岡秀拓(絵本学会会員・イラストレーター)



『こころを折らないでー父と娘の会話ー』

小住和徳(著)・上岡秀拓(イラスト) 夢☆企画

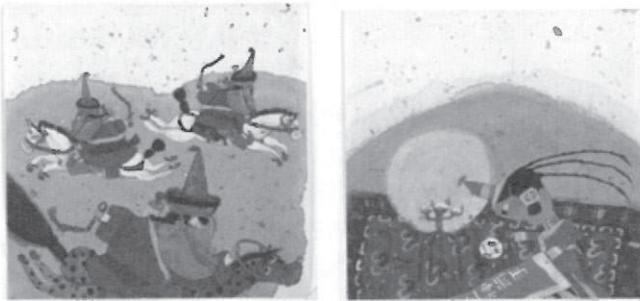
●絵本関係展覧会情報

●安曇野ちひろ美術館

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原
0261-62-0772, 0261-62-0774(Fax)
<http://www.chihiro.jp/azumino/>

【展示】ちひろ・和の心

ちひろ美術館コレクション 絵本と訪ねる、世界の家
【企画展】日中国交正常化40周年記念 中国の絵本画家展
12.9.21(金) - 11.30(金)



●ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2
03-3995-0612, 03-3995-0680(Fax)
<http://www.chihiro.jp/tokyo/>

【展示】ちひろ・子どもたちの情景

【企画展】国際アンデルセン賞受賞画家
アンソニー・ブラウン展 一ゴリラが好きだー

●射水市大島絵本館

〒939-0283 富山県射水市鳥取50
0766-52-6780, 0766-52-6777(Fax)
<http://www.ehonkan.or.jp/>

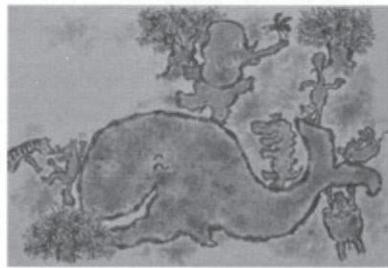
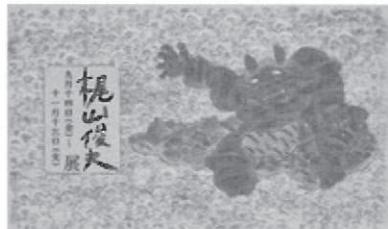
【展示】鈴木のりたけ絵本原画展

12.6.1(金) - 7.29(日)



●イルフ童画館

〒394-0027 長野県岡谷市中央町2-2-1
0266-24-3319, 0266-21-1620(Fax)
<http://www.ilf.jp/>
【企画展】梶山俊夫展
9.14(金) - 11.13(火)



●国立国会図書館 国際子ども図書館

〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
03-3827-2053(代表), 03-3827-2069(音声案内), 03-3827-2043(Fax)
<http://www.kodomo.go.jp/index.jsp>
【企画展】日本の子どもの文学－国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み
12.19(土) -

●世田谷文学館

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10
03-5374-9111, 03-5374-9120(Fax)
<http://www.setabun.or.jp/>
【企画展】斎藤茂吉と『楡家の人びと』展
12.10.6(土) - 12.2(日)

●武蔵野美術大学 美術館・図書館

〒187-8505 東京都小平市小川町1-736
042-342-6004, 042-342-6451(Fax)
mauml.musabi.ac.jp/
【展示】アートとファッショニ、雑誌「ヴィジョニア」の挑戦
12.9.18(火) - 12.1(土)
近現代のブックデザイン考！ 書物にとっての美
12.10.22(火) - 11.17(土)



絵本の声を探して

灰島かり

9

村中李衣さんから、バトンを受けました。李衣さんが語っているのは、声のこと。絵本を語るときに、ぜひぜひ考えたいのが、肉声で読むときのその声のことです。重いバトンにめげそうで、えへい、すうすうしくも不肖灰島が絵本を読む声を誉められた、その体験を書かせてもらいますね。私の声は誉められるようなものではないのですが、とてもうれしかった体験です(実は生涯忘れないほど)。

2001年から、ある児童擁護施設に通って、小学校の低学年の子どもたちと絵本を読んできました。養護施設とは、昔の言葉で言えば孤児院です。一昔前は、親と死別したり、親に遺棄されたりした子どもたちが入所していたのですが、近年では親からの虐待で入所する子どもが増えています(私が通った施設は、9割が被虐待児でした)。

ここには勉強を見てくれる大学生など、色々なボランティアが来ていたので、絵本を読むおばさんもすぐに受け入れてもらいました。私は子どもたちといっしょに絵本を楽しみたい(あわよくば、子どもたちから絵本の楽しみ方を教わりたい)という単純で非教育的な理由で通っていました。

多目的ルームというタタミの部屋に、少ないときは数名、多いときは12名くらいの小学1、2年生が集まります。「本好き」だつたり「ひま」だつたりする上級生が、ふらりと立ち寄ってくれることもあります。常連の2年生に、^{りゅうじん}龍くんがいました(龍神みたいな子どもだったので、私が今つけた仮名です)。小学2年生にしてはひどく小柄で、ひどく乱暴でした。どの子も私の膝で絵本を読みでもらいたがるので、よく膝の取り合いになるのですが、龍人は他の子を突きとばしても断固座ります。「順番」とか、「ほかの子が選んだ本のときは、その子が座る」とか、なんとかルールを作ろうとしましたが、そう言われたときは納得しても、実際には受け入れないです。5年生のユリちゃんはとても大人で「龍人もそのうちわかるから、がまんしな」と、突きとばされて泣きわぬく1年生をなぐさめてくれました。

あるとき絵本を読んだあとで、こっそり龍人を呼んで、ふたりでアメをなめながら「あのさ、1年生を泣かしたら、悪いでしょ」と話し合おうとしました(この場合、ふたりでいっしょにアメをなめていることが大事で、大人なら一杯やりながら、というところです)。口中に甘味という快樂を共有しているうちに、龍人は心を許してくれたらしく「ハイジマはな、きれいな声で読んでくれるから、オレ、(絵本が)すきだ(言外に、だから膝に座るんだ)」とつぶやいたのです。

私は、素直に好意を寄せてもらったことに、すっかりまいあがつてしましました。うれしいのと驚いたので、アメを喉につまらせながらも、なんとか「わたしらは、絵本が好き同士だよね(言外に、だから私は龍人が好きだ)」と伝えました。

後でこの話を、保育士さんにしたところ、ふだん龍人と接している皆さんの驚きようは私どころではなかったのです。

「龍人が『すき』って言ったの? うそでしょ! 口でそ

う言ったんじゃないよね?」「龍人が『きれい』って言ったの? 本当にその言葉を使ったの?」

つまりこの子は言葉で気持ちを表現することが、まったく無い子どもだったのです。施設に来る子どもたちは、ただ虐待を受けたというだけではなくて、命が危険なほどの目に会ったから入所してきているのです。龍人の経験と、心に抱えているものは、もちろん私には計り知れません(この子どもたちは、ふだんは届託を見せることもなく、にぎやかですが、絵本を読んでもらった経験のある子はひとりもいません)。龍人は生まれて初めて、自分に向けて繰りひろげられる物語と絵を受けて、何かが変化したのでしょうか。

ええっと、このとき龍人が熱心に見入っていた絵本は『バーバパパのいえさがし』でした。この施設は、大食堂や部屋を廃止して、10人前後の子どもたちが、ふたりの先生といっしょに、小さなハウスを作って暮らしています。7人の子持ちのバーバパパ一家の暮らししぶりは、施設での暮らし方とどこか似ているのだと思います。みんな、バーバパパのシリーズが大好きでした。もっとも龍人は戦いの場面が無いと、満足しないのです。『いえさがし』では、家をとりつぶしにきた悪役のブルドーザーやパワーショベルと、バーバパパ一家が戦う場面があるので、龍人はここでお尻を跳ねて、とりわけ熱を入れて見ていました。

龍人が私に気持ちを言葉で伝えてくれたのは、このときだけですし、龍人の乱暴も変わりませんでした。でもその後、龍人に膝から降りてもらう方法を、本人が教えてくれたのです。龍人はじめ何人か「自分で絵本を作りたい」と言う子がでてきたので、絵本読みと平行して、絵本作りを始めました。龍人は気が向くと、絵本を作るのに忙しくなるので、膝を独占することが無くなっていました。とはいって、これはまた別の話です。

バーバパパ一家には、バーバモジヤという見た目も他の子とは違うアーティストがいますが、バーバモジヤの毛を、ハリネズミのように尖らせたら、それは龍人のある時期の姿に似ていたかもしれません。

龍人は熱心に絵本を読み、熱心に作り、しかしほぼ1年たつと、だんだん顔を見せなくなり、いつのまにか、すっかり見せなくなりました。龍人にとっての「絵本時代」は終わったのでしょう。でも記憶のなかに、声として絵本が存在することを、私は信じています。



バーバパパのいえさがし

ブリット・ソノン・グラス・ライター 著
ヤシカ・ヤマサキ 絵